



TITLE:

近代中国における女性兵士の創出 — 武漢中央軍事政治学校女生隊 —

AUTHOR(S):

高嶋, 航

CITATION:

高嶋, 航. 近代中国における女性兵士の創出 — 武漢中央軍事政治学校女生隊—. 人文學報 2004, 90: 79-111

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/48640>

RIGHT:

近代中国における女性兵士の創出

—— 武漢中央軍事政治学校女生隊 ——

高 嶋 航

目 次

- 1 はじめに
- 2 軍校への道
- 3 軍校での生活と事件
- 4 女性兵士の創出とその意義
- 5 おわりに

1 は じ め に

「手紙は届きましたか。僕は折を見てあなたとじっくりお話ししたかったのです。」

謝冰瑩は兄から紹介された男性と一年余り文通していたが、ある日突然、その男性が目の前に現れた。

「信じてもらえるかしら。私は軍隊に入るのよ。」

彼はもちろん、すぐにその言葉を理解できなかった。……

「僕は明日帰らなければならない。僕たちもう一度会えるかどうか、教えてください。」

「前線で会いましょう。あなたも軍隊に入るといいわ。」(『一個女兵の自伝』127-128 頁)

1936 年に出版された自伝のなかで、謝冰瑩はみずからの初恋の顛末をこう描いた。誇らしげな女性と困惑した男性——男性は兵士とは男になるべきものだという規範を持っていたから困惑したのであり、女性は女も兵士とならねばならないという信念を持っていたから、兵士となることを誇りに思い、同時に男性にも兵士となることを求めたのである。

中国で近代的軍隊が創設されたとき、女性の参加は想定されていなかった。軍隊は男性のも

のであった。そこから排除された女性は非・国民、あるいは二流の国民として位置づけられてきた。1926年、国民党は打倒軍閥、打倒帝国主義のスローガンを掲げ、幅広い民衆を動員して連合戦線を組織し、国民革命の名の下で北伐を進めていた。何香凝が「国民革命は女性の唯一の活路である」と述べたように、女性もまた連合戦線の一翼を担っていた。これまで二流の国民に甘んじてきた女性たちは、しばしば男性よりも激しい熱意をもってこれに参加した。国民政府の統治下では、これまで政治と無縁だった女性たちが婦女協会を組織して政治活動を始めていた。女性兵士の創出は、女性の政治への参加、革命への参加という潮流の中で実現したのである。

中国では「婦人は軍に入らず」（『隋書』宇文述伝）という建前はあったものの、その長い歴史において、女性が従軍した事例には事欠かない。彼女たちはときに兵として、ときに将として、あるいは家族や娼婦として軍と関わった。隋末に娘子軍を率いた平陽公主、明代の秦良玉、沈雲英、太平天国の洪宣嬌、蘇三娘など、歴史に名だたる女性も数多い。女性たちの従軍の契機は様々であったが、夫や父など身近な男性との関係によるものが多い。蘇三娘は夫の仇を討つために家財をなげうって人を集めたことが契機となった。軍官の妻であった秦良玉は、夫の死後、夫の軍隊を引き継いで統率した。農民の蜂起では、一家全員が参加することがまま見られた。彼女たちは、無理やり、あるいはやむを得ず戦争に参加した¹⁾。一方、二十世紀の女性兵士たちは、家族の反対を押し切って兵士となった。彼女たちが運命共同体とみたのは、家族ではなくして国家であった。「孝」という理念によって正当化されてきた女性の従軍は、二十世紀に至って、愛国主義や民族主義によって正当化されるようになった。

1911年の辛亥革命の際、女子北伐敢死隊をはじめ多くの女子軍が組織された。例えば、女子北伐敢死隊は軍政府より軍備を支給され、海軍陸戦隊教官杜偉による軍事教練を受け、北伐に参加した。また、女子北伐光復軍は呉淞軍政分府都督李燮和の批准をえて成立し、南京での戦闘に参加した。女子軍については、それを称賛する声がある一方、女性性を逸脱する行動として批判的な声も根強く、南北の和議が成立すると、政府によって解散を命じられた²⁾。辛亥革命期の女性兵士は、愛国主義、民族主義によって動機づけられ、自発的に結成された。それは革命軍にとって予期せぬ事態であったとはいえ、紛れもなく近代的女性兵士の誕生であった。だがそれは散発的な事件に終わり、のちの女性兵士の直接の淵源とはならなかった。

1926年より始まった北伐の過程で設立された武漢中央軍事政治学校（以下、「軍校」と略記）の「女生隊」は、政府が女性兵士を養成しようとした初めての試みとしてよく知られている。彼女たちは人民解放軍の誕生と位置づけられる南昌蜂起に参加し、その直後の広州蜂起で華々しく戦い、幾人かは著名な共産黨員として後世に名を残した。その意味で軍校を人民解放軍における女性兵士の直接の起源とみなすことができる。軍校を有名にしたのは、後に作家となって活躍する謝冰瑩が従軍の模様を逐一新聞に投稿し、それが単行本化されて国内外の多くの

人々に読まれたからである。ところが、個々人の回憶、その集成である『大革命洪流中の女兵』（以下、『女兵』と略記）³⁾、紹介記事的な短文を除いて、これまでのところ専論と呼ぶに値するものはまだ書かれていない。軍校に関する最も詳細な研究といえる『武漢中央軍事政治学校』（以下、『軍校』と略記）でも女性兵士に関する言及は寥々たるものである。

女生隊を知るための主要な手がかりである回憶には様々な問題が付きまとう。国民党右派によって半ば強制的に解散させられた女生隊について回憶することは、謝冰瑩という例外を除いて、国民党員にとっても共産党員にとっても長らく不可能であった。胡毓秀は1958年に「第一批女兵」（『解放軍文芸』1958-3）という文章を書いたが、彼女のいう最初の女性兵士とは、南昌蜂起に加わった女性兵士のことであり、軍校については解散直前の混乱した状況を記すのみであった。1950年代に人民解放軍の誕生を告げる南昌蜂起のことは高らかに語れても、国共合作という複雑な時代の産物である武漢軍校について語ることは難しかった。元隊員たちが重い口を開き始めるのは、政治的迫害の心配がなくなった文革以後のことである⁴⁾。胡毓秀も1981年に「首批女兵話当年」（『女兵』所収のタイトルは「大革命時期的第一批女兵」）という文章を発表した。そこでは、「最初の女性兵士」が軍校の女性兵士に変わっている。しかしながら、1980年代以降に公表された回憶のほとんどが共産党員によるものであり、そうでない場合でも共産党の術語と歴史観をもって再構成されている。結果としてきわめて画一的、教条的な女性兵士像しか浮かび上がってこない。軍校で学んだ女性兵士は、共産党員ではなかったし、当時の彼女たちが、回憶の時点で持っていた共産主義に関する知識を持っていたとは考えられない。回憶の偏向に留意し、女性兵士を脱神話化してその実像に迫るのが本稿の第一の目標である。

第二の目標は女性兵士創出と社会主義の関係を再考することである。上野千鶴子は、共産主義ソ連と革命中国について、「労働力総動員体制ともいえるべき統制経済のもとでは、経済戦の戦士として女性の動員にためらいがなかったし、同じように軍事戦の戦士としてもためらいが少なかったことだろう。軍隊の「男女共同参画」は共産圏において先行している」（上野千鶴子、55頁）と、女性兵士の動員を社会主義と結びつけて考えている。第二次世界大戦初期、アメリカで女性を軍隊に入れるかどうか論じられたとき、反対派の理由の一つは、女性を軍隊に参入させるのは共産主義やナチズムの考えである、ということであった（『総力戦と女性兵士』96頁）。一方、1938年に出版された小冊子『各国女兵士の出現』では、かなりの紙幅をロシアのポチカレワ女史の叙述にあてているが、彼女は第一次世界大戦時に婦人決死隊を率い、革命後のソ連で反革命家として射殺された人物である。ポチカレワ女史の例は、社会主義と女性兵士の関係が単純ではなかったことを物語っている。武漢国民政府は国民党左派と共産党との連立政権であり、社会主義の影響が想定されるのもいわれのないことではない。しかし中国では清末以来、国家・民族のために兵士となることを志願する女性たちがいたことを忘れてはならな

い。(外来思想である) 社会主義が最初にありきという前提から議論を始めるのではなく、歴史的文脈に留意して女性兵士創出を考える必要があるだろう。

第三の目標は、ナショナリズムとジェンダーという視点から女性兵士を考察することである。これは言い換えれば、ナショナリズムの力学とジェンダーの力学との相克という観点から、ソ連、アメリカ、日本の女性兵士を比較した佐々木陽子の研究に中国の事例をいかに接合するかという問題でもある。佐々木によれば、ナショナリズムには排除・差別化と包摂・統合化という二つの相反する側面があり、後者の側面が女性兵士の創出をもたらした。一方、ジェンダーは、男女をそれぞれ前線と銃後に振り分け、男は兵士、女は母・妻としての性別役割分業規範を課す。平時であれば、女性は国民から排除されるが、前線と銃後が混乱した状況に追い込まれたとき、ナショナリズムの平準化が強く働いて、ジェンダーの力学を凌駕し、女性兵士が創出される。そしてナショナリズムとジェンダーの相克の帰趨を決定するのは、戦局の進展（具体的には戦局の悪化）と戦略思想であるという（『総力戦と女性兵士』27-31, 148頁）。佐々木のモデルを持ち出すことによって、中国の女性兵士創出という現象を世界史的文脈において検討する方途を探る一方で、モデルの有効性を検証してみたい。

2 軍 校 へ の 道

2.1. 軍校の沿革

1924年6月16日、中国国民党陸軍軍官学校の開校式が執り行われた⁵⁾。孫文を総理とし、蒋介石を校長に、廖仲愷を総党代表にした通称「黄埔軍校」は、1926年3月に中央軍事政治学校と改称され、国民革命軍の北伐進展にともなって国民政府統治下に組み込まれた南寧、潮州に分校が設置された。1926年10月10日の武漢攻略後まもない10月16日、包惠僧を中心に政治訓練班設置の準備機関が作られ、同月27日、国民党中央は政治訓練班を中央軍事学校政治科に改めることを決定した。校址は清末に張之洞が創設した武昌の両湖書院とし、鄧演達が政治科主任に任命された。11月1日、鄧演達を主席に、郭沫若、李民治（李一氓）、彭漪蘭、王法勤、楊樹松、王樂平、陳公博、詹大悲、李漢俊、董必武、劉芬、包惠僧、紀錢、鄭強からなる招考委員会が設置され⁶⁾、各地の新聞に受験生募集の記事が掲載された。もともと湖北、湖南、江西、四川、上海、奉天で試験を行う予定だったが、国民政府の支配が未だ及んでいない河南、安徽、山東、直隸、山西、陝西、甘肅、熱河からも受験生がやってきた。また、韓国青年会、共産党、共産主義青年団（以下、「共青团」と略記）からも受験生が推薦されてきた（『黄埔軍校史料』417頁）。各地での一次試験と武漢での二次試験を経て、約1,200名の学生が合格した。1927年1月には黄埔軍校の炮兵科、工兵科の学生が武漢に到着した。これにより1月19日に中央軍事学校政治科は中央軍事政治学校武漢分校と改称され、校長には蒋介石が就

任した。南昌にいた蔣は名目上の校長に過ぎず、軍校を主宰したのは鄧演達であった。しかし鄧も多忙であったために、学校の日常的業務を取り仕切ったのは、政治総教官の惲代英であった。教育長・訓練部主任・学生総隊長は張治中、秘書長・政治部主任は周仏海⁷⁾、軍事総教官は藍騰蛟、政治主任教官は惲代英、入伍生総隊長は楊樹松、女生隊隊長は鄭奠邦⁸⁾、指導員は彭漪蘭⁹⁾だった。

開校式は2月12日に学兵団¹⁰⁾と合同で行われ、学生の総数は3,000人近くに上った。3月中旬に開催された国民党二届三中全会において、軍校は校長制から委員制に改められ、譚延闓、鄧演達、惲代英が常務委員となった。また国民政府が武漢に遷都していたことから分校の名を止め、武漢中央軍事政治学校と改称した。4月中旬に黄埔軍校の政治大隊五期生が卒業して、各軍に配属された。同月19日に第二次北伐出兵式が行われ、21日に学兵団を解散、1,300余名が軍校の入伍生となった¹¹⁾。7月中旬に国共合作が破綻すると、共産党員の教官・学生を多数擁していた軍校は閉校を余儀なくされた。

2.2. 女生隊の創設

武漢攻略の興奮も冷めやらぬ10月中旬のある日、のちに女生隊指導員となる彭漪蘭は鄧演達の事務室に呼ばれた。そこには蔡暢やソ連の顧問ら数人がいて、武漢分校のことを話し合っていた。彭は鄧演達から、北伐で最も欠乏しているのが政治幹部であり、なかでも女性幹部が不足していること、武漢分校では女生隊を設けて正規の軍事訓練を受けさせ、卒業後は男子学生と同じように軍官を担当してもらうこと、を告げられた（『女兵』17頁）。国民政府は大衆運動に力を入れ、その援護のもとで快進撃を続けたが、大衆運動があまりに急激に拡大したため、深刻な指導者不足に悩まされていた。この問題を解決すべく、各種の幹部養成機関が設置されたが、女生隊もまた女性幹部養成機関の一つとして構想されたのである¹²⁾。軍校には炮科、工科などがあったが、このたび武漢で募集したのは政治科の学生であり、「健全なる宣伝の人才を養成し、以て軍の政治工作の下級幹部および各地の社会工作人員に充てること」（『申報』1926年11月23日）を趣旨とした。女生隊は政治科に所属し、宣伝工作を担う「兵士」と位置づけられていた。

国民革命期、女性の従軍は女生隊に止まるものではなかった。1926年7月、広東では北伐軍出征にあたって中国国民党党立紅十字会（1925年12月設立）が女子北伐救護宣伝隊を組織し、部隊に従って救護・宣伝活動に携わっていた。救護隊長は高恬波、宣伝隊長は李励莊、13名の隊員のうち、10名は軍人家属婦女救護員伝習所で学んでいた。なお隊員には、鄭立真（鄧演達夫人）や朱光珍（陳銘枢夫人）がいた¹³⁾。国民党広西省支部は北伐女宣伝隊を組織した。彼女たちは、軍装に身を包み、国民革命軍第七軍に従って、宣伝、看護、慰労活動に従事した。隊長は第七軍軍長李宗仁の夫人、郭德潔であった¹⁴⁾。隊が湖南省長沙に着いた時、各界の女性

200 名から歓迎を受けたが、その席上で隊員の一人、余慧淑は次のように語った。「女性の責任は男性に劣るものではない。男性のやれることは、すべて女性もやらねばならない。軍官学校は女子学生を入れないが、これは特に不平を抱かせる事である。もし女子学生を募集して、誰一人応募しなかったら、私も納得するが、女性が来ないから入れないということはできない¹⁵⁾。」実は、1925 年 6 月に彼女は軍校のトップであった蒋介石、廖仲愷に同様の請願を行っていた。国民党の信奉者であった彼女は、男女平権の観点から女子の軍校入学を求めた。彼女が引き合いに出したのは、木蘭であり、ロラン夫人であった。木蘭は古来より女性兵士の代名詞であったし（注 22 参照）、ロラン夫人は清末以降、愛国の志士、女性の英雄として広く知られていた。この請願はどうやら無視されたようで、彼女は自ら軍校に出向いたが校長に会うことはできなかった。ついで政治部と特別区党部に宛てて同様の請願をしたためたが、若干論法を変えている。「ロシア国の女子は従軍を実行し、すでに世界の先例を開いた。わが国民党は男女平権とロシア主義を提唱し、〔その間に〕甲乙をつけていない。どうして女子には従軍の規定がないのか。中国の二億の女子が従軍の権利を獲得できないのは、不平等の極みだ」と述べた。「ロシア主義」というのは共産主義のことであろうが、彼女が軍校への女子の入学を求める最大の根拠は、両方の請願書に見える「男女平権」であったことは明白である。共産主義にかこつけて、女子従軍の主張の論拠を固めようとしただけで、彼女が共産主義を理解し信奉した上でこうした主張がなされたわけではない¹⁶⁾。

女子北伐救護宣伝隊は大いに歓迎され、10 月 26 日に国民党中央婦女部は第二隊を派遣するに至った。彼女たちの活躍は、軍の上層部に女性の可能性を強く認識させたであろう。妻の鄭立真が隊員として参加していた鄧演達が、女性の潜在能力を十分に活用するために、救護、宣伝、慰労に限定せず、本格的な軍事教育を受けさせようと考えたのは、ごく自然ななりゆきであった¹⁷⁾。女性の側でも余慧淑の発言に見られるように、軍校への入学を強く希望する声があった。女性たち自身がそれを望み、みずからその可能性を示したことに女生隊創設の起点を見出せないだろうか。ソ連顧問の関与は限定的であり、彼らの指導もしくは影響により女性兵士が生まれたとするのは、あまりにソ連顧問を万能視しすぎた見方である。彼らは運動に方向性を与え、具体的なアドバイスをしたかもしれないが、女性たちの熱意がなければ企画段階で潰えただろうし、そもそも女生隊を創設するという提案すらなされなかったであろう。

2.3. 受験の動機

謝冰瑩は男勝りの少女だった。父は開明的だったが不在がちで、謝は専制的な母に纏足を強いられた。ハンガーストライキを強行して、纏足を続けることを条件に大同女校へ入れてもらったが、入学後すぐに纏足をほどいた。教会学校では、国恥記念日のデモで「打倒帝国主義、打倒軍閥」と叫んで退学になった。政治に傾倒していたかに見える彼女の最大の関心は、実は

文学であった¹⁸⁾。彼女が真に文学の夢から目覚め、愛国を意識するようになったのは、1925年の五・三〇事件であったとみずから記すが、それでもそれは軍校の受験に直接つながるものではなかった¹⁹⁾。『一個女兵的自伝』（133頁）では、親の取り決めた結婚で苦労した「二哥」が彼女に同じ苦労をさせないために、結婚から逃れるには軍校を受けねばならないと言ったという。1969年に台湾で記した文章によれば、「二哥」が彼女に、『大公報』に学生募集の記事が載っていることを告げ、彼女はすぐさま受験を決意した。兄がその理由を尋ねると、「第一に、国家・民族のため、国民革命に献身する。第二に、男女平等を求めるため……」と答えた。おりしも「三哥」がやってきて、受験に反対したが、彼女の意志は変わらなかった。しかし翌朝、徐特立校長は軍校を受験すべきではないとの訓話をおこない、意志の弱い生徒は動揺したという（『謝冰瑩文集』中、15頁）。

異なる時期に書かれた謝冰瑩の文章から、受験の動機を探るには相当の注意が必要である。たとえば、徐特立に関して、謝は1936年出版の『一個女兵的自伝』の中で、彼が女子学生の軍校応募に賛成したと記している（『謝冰瑩文集』上、60頁ではこの箇所が削除されている）。女生隊隊員の一人、王容箴は、徐特立が軍校の受験を学生たちに熱心に勧めたと証言しているから（『女兵』176頁）、徐が軍校受験に反対したという1969年の叙述は意図的な歪曲の可能性がある²⁰⁾。謝は『一個女兵的自伝』の序文で、「私は度胸のままに書き続け、社会の誹謗や攻撃を恐れはしない。私は自分のことを書く。他人が何をしようが勝手だ」（4-5頁）と言っているが、執筆時点における種々の正当化が当然なされていると考えるべきである。逆に、政治的なものと最も遠い理由づけ、すなわち、結婚から逃れることがホンネだったとみることはできないだろうか。当時、愛国的行動をとった女子学生の多くが、国民党（や共産党）の主張を正しく理解し、それに基づいて行動していたわけではない。それよりも結婚こそ身近で切実な問題であった²¹⁾。兄の言うように、この難関から逃れるには、長沙から離れるしかなかった（『一個女兵的自伝』133頁）。そして、衣服や小遣い銭まで支給してくれるという軍校は、家族を離れて自立することの難しい彼女たちにとってまたとない逃避所であった。黄傑（のち徐向前夫人）は、伯父から不本意な結婚を強要されたことから、母の許しを得て家を出て武漢へ行き、湖北女子師範学校に入学した（『女兵』56頁；『中国女紅軍』465-467頁）。衣食が支給される師範学校もまた、女性が家庭を離れて自活できる数少ない選択肢の一つだった。

受験者は独身女性だけに限らなかった。王亦俠は結婚して子供がいた。夫の張稼夫は武漢の中央農民運動講習所の教員となり、1927年4月に共産党に入党した。子供は人力車夫の家に里子に出した（陳力田、8頁）。共産党員の陳英や胡筠も夫や子供を残して武漢にやってきた。友人や親戚に誘われて受験するものもいた。蕭鳳儀・蕭鳳文、楊慶桂・楊慶蘭は実の姉妹、陶恒馥は彭援華の従妹、謝冰瑩と謝翔霄も親戚だった。

共産党、共青团、婦女協会関係者も多かった（表1参照）。何柏華、胡毓秀、褚志元らは組織

人 文 学 報

表1 女生隊隊員の履歴

名前	籍貫	生没年	学歴・職歴	入学前活動	卒業後
王亦俠	山西省臨汾	1903 -	山西女子師範学校, 女師附小教員, 北京世界語学校		第二子懷妊。夫と地下活動
王冬珍	河北省任県	1898 - 1977	直隸第一女子師範学校, 早稲田大学	国民党	
王鳴皋	湖北省光化	1909 -		婦女協会, 放纏足会, 共産党員, 県党部婦女部長, 党員志願兵団	南昌瑞金→上海
王容箴	湖南省長沙	1908 -	湖南第一女子師範学校		帰郷
何柏華 (何正生)	福建省閩候	1912 - 1974		共産党員	南昌起義→福建
顔珍			湖南第一女子師範学校		
危拱之	河南省信陽	1908 - 1973	河南第二女子師範学校		広州→海陸豊→モスクワ
邱繼文	湖南省平江	1901 - 1927	啓明女子師範学校, 湘蔭県中学教員		広州起義
許聞道	湖南省寧郷	1903 - 1927	湖南第一女子師範学校	共産党員	武昌中山大学
胡毓秀	江西省高安	1906 - 1983	江西女子師範学校	共産党員, 県婦女協会	瑞金→上海 モスクワ?
胡昀 (胡筠)	湖南省平江	1898 - 1934	平江女子学校	19歳で結婚, 男児出産, のち学校へ, 青年団	故郷で革命活動
胡蘭畦	四川省成都	1901 - 1994	五保聯立女子小学, 川南師範附属小学教員	成都婦女公会, 国民党員	国民党婦女部
顧曼俠			湖南第一女子師範学校		
黄傑	湖北省江陵	1910 -	武昌第一女子中学, 湖北女子師範学校	1924結婚。家庭を離れる。	教導団, 電報を受け帰郷, 中共松滋県書記
黄自純 (黄静汶)	湖南省湘蔭	1911 -	武漢大学文学院予科	青年団, 県婦協会	帰郷
黄幼玉	湖北省応山		湖北女子師範学校	断髪	
史明恕	湖北省	1905 -	湖北女子師範学校		湖北女子師範学校復学
施祖謙	湖北省応山	1907 -	湖北女子師範学校	断髪	軍医処に配属されるも母に阻止され帰郷
謝漢藻 (謝瀚藻, 謝翔霄)			湖南第一女子師範学校		帰郷
謝鳴岡 (謝冰瑩)	湖南省新化	1906 - 2000	湖南第一女子師範学校		帰郷
周越華 (周月華)	湖北省広済	1904 - 1977	湖北女子師範学校	共産党員, 湖北省婦女協会特派員	教導団, 広州→海陸豊→上海
徐林俠 (徐麗芳)	江蘇省邳県	1905 - 1949	江蘇第三女子師範学校	抗婚, 国民党員, 江浙党務訓練班, 共産党員	故郷で活動, 解放時に殺害
舒紹猷			湖南第一女子師範学校		
章秋桂	浙江省台州				上海で地下工作決定→帰郷
錢瑛 (陳海平)	湖北省咸寧	1903 - 1973	湖北女子師範学校	青年団, 共産党員	
錢訓英			湖南第一女子師範学校		
曾憲植	湖南省湘郷	1910 - 1990	湖南第一女子師範学校		教導団, 広州→海陸豊→香港
曾璞 (彭鏡秋)	湖南省宜章	1900 - 1984	湖南第三女子師範学校, 宜章県女師小学教員	反日会副会長, 県婦女協会会長, 学兵団	教導団, 広州→海陸豊→香港
孫贊			湖南第一女子師範学校		
譚勤先 (譚榮華)	浙江省桐郷	1907 -	振華女校, 景賢女中	上海市学聯会代表	十一軍政治部→瑞金→上海
譚珊英 (譚浩郁)	湖南省茶陵	1909 -	湖南第一女子師範学校		帰郷, 省立二中, 1930革命復帰
褚志元	江西省高安		江西女子師範学校	共産党員, 県婦女協会	
張瑞華	河南省信陽	1909 - 1995	河南第二女子師範学校	耀芒社	広州起義→海陸豊
張友欽 (張益志 (知))	湖北省鐘祥	1909 -	湖北女子師範学校		第二方面軍, 広州→海陸豊

近代中国における女性兵士の創出（高嶋）

表1 女生隊隊員の履歴（続き）

名前	籍貫	生没年	学歴・職歴	入学前活動	卒業後
陳雲裳（陳英）	浙江省海寧	1905 -	高小卒	結婚反対。杭州で結婚。家族と関係断絶、共産黨員。教員	上海で地下工作決定→帰郷、四人の女子出産、離婚、1937 革命に復帰
陳兆森	湖南省桃源	1903 - 1927	湖南第二女子師範学校	1925 共産黨員	馬日事变後帰郷、教員
陳德芸	四川省		四川第二女子師範学校		
鄭梅先（鄭梅仙）	湖北省武昌		湖北女子師範学校		
陶恒馥	湖南省岳陽	1901 -	湖南第一女子師範学校、岳陽女子職業学校教師	岳陽市婦女大会で演説	モスクワ
鄧銘芳（鄧名芳）			北京大学		
彭援華（彭文）	湖南省岳陽	1905 - 1994	湖南第一女子師範学校	共産黨員、県婦聯主任	広州起義→潮州→朱徳軍・瑞金
孟慶樹	安徽省寿県	1911 - 1983	県立高級中学		モスクワ
游曦	四川省巴県	1908 - 1927	四川第二女子師範学校	青年団、県婦協会	広州起義
熊天春	上海？		上海大学		広州起義→海陸豊
楊玉蘭			湖北女子師範学校	断髪	
楊慶桂（楊染香）	河南省羅山	1902 - 1982	河南第二女子師範学校		広州→海陸豊
李秋岳	朝鮮	1901 - 1936		三・一蜂起、共産黨員	モスクワ
李淑寧（趙一曼）	四川省宜賓	1905 - 1936	宜賓県叙府女中		モスクワ
劉曼君	湖南省		湖南第一女子師範学校		広州→東江、のち湖南
廖徳璋	湖南省		湖北女子師範学校		広州途上で死亡
黎樹榕	湖南省		湖南第一女子師範学校	共産黨員	帰郷、省立二中、1930 革命復帰

からの指示で受験した。胡毓秀は組織の決定を歓迎したが、それは地元を離れることで、親の決めた結婚から逃れることができるからであった（『女兵』111 頁）。共産黨員だからといって、高邁な理想を抱いて軍校にやってくるとは限らないのである。

彭漪蘭は軍校の学生について「合格した女子学生はみな初中以上の文化水準をもち、なかには大学生もいた。大多数は進歩的青年であった。あるものは学生運動の積極分子であり、あるものは女性運動の幹部であり、またあるものは親が取り決めた結婚に反対し、あるいは夫や義理の母の虐待に耐えかね、封建のくびきを突き破るために軍校を受験した。女子学生のなかには共産黨員もいれば共青团員もおり、国民党左派もいれば、いずれの党派に属さないものもいた」といっている（『女兵』20-21 頁）。

たとえ受験を志したとしても、実際に受験するまでには数々の障害を乗り越えねばならなかった。胡蘭畦は重慶女子工業社の同志を動員して受験しようとしたが、一人は教師稼業で老母を養わねばならず、一人はまもなく子供を出産するというで受験に行くことができなかった（『胡蘭畦回憶録』123 頁）。じっさい、家族は最大の難関であった。もと中国同盟会員の父と共産黨員の兄がいた黄静汶の場合、家族は合格を喜んでくれた。しかし両親にだまって軍校を受験したものの方が多かったのではないだろうか。曾希平の場合、両親は長沙の蚕桑学校を受けさせたつもりだった（『女兵』67 頁）。游曦の両親は『新蜀報』で娘の合格を知り、しぶしぶ許可した（『女兵』219-220 頁）。施祖謙は家族に受験することを告げたところ、両親や祖

母に反対され、外出を禁止された。友人の黄幼玉の奇計により、なんとか脱出して受験することができたのである（『女兵』135頁）。女性にとっては軍校を受験すること自体が戦いだった。だから符浩は「女子学生は男子学生に比べて勇敢で粘り強かった。というのも男子学生の多くは学校を卒業したばかりで世間知らずだったが、彼女たちの多くは叛逆した女性であり、結婚を経験した者さえいたから、男子学生にくらべて世事をわきまえていた」と評価したのである（符浩、68頁）。

『女兵』に見える女性たちの行動は、多くの場合、イデオロギー的な修飾をほどこされているが、当時であれば別のもっと単純な言葉で動機を説明したであろう。それは、寡婦の子供として散々苦勞を味わった史明恕が抱いていた社会に対する反感とそこから解放されたいという気持ち（『女兵』146頁）、花木蘭²²⁾への憧れ（『女兵』203頁）などである。鄭味虚はインタビューの中で、受験当時、革命とは何のことか分からなかった、ただ個人の解放のみを求めていると率直な感想を語っている²³⁾。

2.4. 試 験

一次試験は各省市の国民党支部が主催し、湖北、湖南、江西、四川、上海、奉天には特派員が派遣された。また河南、安徽、山東、直隸、山西、陝西、甘肅、奉天、熱河の党支部および韓国青年会からは受験生が紹介されてきた²⁴⁾。一次試験では三民主義、国文、数学、中国・外国の歴史・地理、博物、理化の試験がおこなわれ、武漢でおこなわれた二次試験では国文、党と政治の常識試験、身体測定が課せられた。一次試験については、実施の状況は各地でまちまちだった。

長沙（湖南省）での試験科目は数学、歴史・地理、物理、三民主義、時事政治、作文などであり、その後体重測定が行われた。体重には明確な規定があったため、石や本をポケットに入れる学生もいた（『女兵』65-66頁）。長沙で受験した譚浩郁は、体格検査が第一の難関で同級生たちは衣服を脱いで医者に見てもらうことを恐れて検査を受けないものがいたという。また家庭状況や政治態度に関する口頭試問があったとも記す（『女兵』160頁）。2,000名が受験し、男子204名、女子44名が合格した²⁵⁾。

重慶（四川省）の場合、一日目は国文、数学、物理、化学の試験があり、二日目は政治の試験で、何が三民主義か、といった問題が出された。重慶では政治審査が非常に厳格であったと胡蘭畦は記す。共青团員（原文は社会主義青年団員）、進歩的青年たちは歓迎されたが、国民党右派、国家主義派、そして反革命と関係ある人は一切受け付けられなかった。それだけではない。胡とともに女性の経済面での自立を促し実践してきた陳續虞は、革命運動に参加してこなかったことから、応募するのさえ難しかった。胡の尽力で受験することができたが、最後にはやはり政治面で信用されなかったことから合格できなかった（『胡蘭畦回憶録』124-125頁）。

上海では1926年11月23日の『申報』に募集広告が掲載された。それによると、速成科、本科、女子特別班の学生を募集し、18歳から20歳以下の、中等以上もしくは同等の学歴を有し、国民党支部および党员2名以上の紹介があることが条件であった。一次試験は国文、算学、中国・外国の歴史・地理、博物、理化、口答試験、身体検査であった。上海の試験を担当した沈雁冰（茅盾）によると、上海では男女合わせて約1,500名が受験し、2週間かけて審査をした結果、150名あまりを合格させた（『女兵』4頁）。

かくて厳しい試験をくぐりぬけた合格者は意気揚々として武漢にやってきた。彼女たちは二次試験があることを知らなかった。再試験の知らせに驚いた受験者たちは反対運動を起こした。反対運動の代表10名は除名処分を受けたが、そのうち女性が2人いた。1人は共产党员の周鉄忠で、彼女は婦女政治訓練班に入った。もう1人は謝冰瑩で、兄の助けで偽名を用い、北部諸省からの受験者にまぎれて受験し合格した²⁶⁾。再試験では国文、政治常識、身体検査がおこなわれた。不合格者の一部は再試験を経て、南湖の総司令部学兵団か婦女政治訓練班に入った²⁷⁾。

2.5. 女生隊の人数

女生隊には当初100名の枠が用意されていたが、受験生があまりにも多かったために合格者が大幅に水増しされた。人数については諸説あるが、女生隊指導員の彭漪蘭は195名（『女兵』19頁）、同じく指導員の鍾復光は183名で後に拡大して213名（『女兵』31頁）、3月5日に撮影した写真に依拠した譚樂華は178名（『女兵』102-103頁）、陳英と王容箴は183名（『女兵』129、177頁）という。最も信頼性が高いのは、1927年2月23日刊『革命生活』に掲載された「中央軍事政治学校武漢分校籌備經過概略」にある195名という数字であろう（『黄埔軍校史料』416-420頁）。『武漢国民政府史』『軍校』はこの資料に拠って195名説をとる²⁸⁾。

『女兵』236-237頁には当時の新聞（上海『申報』、四川『国民公報』）と隊員の回憶から再構成した130名分の名簿が掲載されている。この名簿にはいくつか注意すべき点がある。軍校に合格したにもかかわらず、共産党の指示により宋慶齡が主宰する婦女講習所へ派遣された朱華亭は名簿に収録されていない（『中国歴代女名人辞典』54頁）。また、学兵団員で、学兵団と軍校の合併により女生隊に所属がえとなった曾璞（彭鏡秋）が名簿に見えることから（『女兵』84頁）、これは合格者名簿ではない。ところが一次試験に合格し二次試験で落第した受験生の名が見える。四川省の第一次試験合格者のうち、柯采珠、韋澄、李芬は第二次試験で落ちた²⁹⁾。うち、柯采珠は憤死した（陳徳芸、98頁）。残りの2名は婦女幹部訓練班に入ったにもかかわらず、名簿に採録されているのである³⁰⁾。これは名簿作成において、四川省での一次試験合格者を採録した四川の新聞を利用したがために生じた混乱である。逆に、故意に採録しなかったと思われる例もある。蒋介石を擁護したために退学処分となった劉若華³¹⁾、国民党員でのちに台湾にわ

人 文 学 報

表2 女生隊名簿（漢字の音順）

*は『女兵』未収人物を示す

〈 〉は典拠を示す。典拠一覧は表の末尾に掲げた

王亦俠	黄新民	* 孫元珍 〈C〉	方晚成
* 王徽之 〈AD〉	黄炳先 (黄炳仙)	孫贊	彭援華 (彭文)
王滌新	黄幼玉	譚勤先 (譚樂華)	彭鏡秋 (曾璞)
* 王冬珍 〈F〉	史曼冰	譚珊英 (譚浩郁)	彭秀
王鳴皋	史明恕	譚雪志 (譚毓瀨)	孟慶樹
王容箴	施祖謙	段惠蒼	游曦 (游伝玉)
何光玉	謝漢藻 (謝瀚藻, 謝翔霄)	褚志元	熊虞芳
* 何柏華 (何正生) 〈G〉	謝冰瑩 (謝鳴崗, 謝鳴岡)	張穎新	熊天春
何芳	謝有倫 (謝友倫)	張去非	俞襄君
柯常珠	朱国中	張志	余文玉
賈孟璠	周越華 (周月華)	張瑞華	余烈勲 (余輝欽)
顔珍	周開璧	張先怡	楊玉蘭
危拱之	周毅	張弼	楊慶桂 (楊染香)
季毓秀	周佩璜	張鳳毛	楊慶蘭
邱繼文	胥季君	張友欽 (張益志, 張益知)	楊若霞
許玉英	徐潔萍	張瑤卿	駱英豪 (駱劍冰)
* 許聞道 〈G〉	徐全勇	陳雲裳 (陳英, 陳瑛)	李蕙瑞 ¹
龔国宝	徐林俠 (徐麗芳)	陳覺悟 (陳夷堅)	李琴熙
経瑞雲 (経芝祥)	舒紹猷	陳毅	李樹輝
* 嚴毓華 〈B〉	章秋桂	陳潔	* 李秋岳 〈F〉
胡毓秀	蕭敬之	陳善蘭	李淑寧 (趙一曼)
胡寶同	蕭石光	陳兆森	李錫敏
胡筠 (胡昀, 胡雲)	蕭鳳儀	陳德芸 (陳德馨)	劉輝
胡蘭畦	蕭鳳文	鄭梅仙 (鄭梅先)	劉光慧 (李翰)
顧曼俠	* 盛業煌 〈E〉	* 鄭味虚 〈H〉	* 劉若華 〈B〉
吳俊偉	錢訓英	唐瑾球	劉瑞瑜
吳妙章	宋華英	唐瑜	劉慕棠
江淑普	宋華義	陶桓馥	劉曼君
江舜新	宋伯均	鄧蘇	龍文娛
* 江慎初 〈B〉	宋思純	鄧銘芳 (鄧名芳)	呂儒貞
高瑩九	曹完璧	童幼芝	廖淑雲
黄傑	曹誠	傅維鈺	廖德璋
黄厚吉	曹沢芝	文曼魂	林秀石
黄子固	曾希平	方覺	黎樹榕
黄自純 (黄静汶)	曾憲植	方天	

1 『女兵』には「楊蕙瑞」とつくるが、別名ではなく誤字であろう。

【典拠】

- A 許子威「從軍校學習到広州暴動」
- B 胡蘭畦「一段難忘的曲折的女兵生活」
- C 符号「回憶軍校女生隊十二位同學」
- D 劉光慧「小脚女兵千里隨軍記」
- E 『回憶揮代英』
- F 『黄埔軍校將帥錄』
- G 『中国歴代女名人辞典』
- H 『二十世紀中国女性史』

たった王冬珍がそれである。

韋澄，李芬を削除し，名簿未収で他の史料から女生隊に在籍したことが確認できる人物を拾いあげて作成したのが表2である。これでも140名で，3割にあたる約50名（学兵団の30名を加味すれば4割にあたる）の名前が不明となっている。生き残って証言を残すことのできた数

少ない「勝者」たちの記憶から漏れたこれら多くの女性は、無党派層か国民党右派に属する人々であったと推定される。なぜなら、当時軍校内の共青团員や共産党員はそれぞれ独自の会合をもっており、その構成員の名前はよく覚えているはずだからである。

2.6. 女兵の平均像

軍校に合格したのは、どのような女性だったのか。表2の中から多少とも伝記的事項がわかる52名を選んで一覧にした表1をもとに、その平均像に迫りたい。

まず年齢を見よう。回憶では17、8歳から30歳くらいまでという（『女兵』154、177頁）。表1で生年のわかる女性34名の統計を取ってみると、1927年1月1日現在の満年齢で最年少が14歳、最年長が28歳、平均20.6歳となり、数え年に換算すればおおむね回憶の通りということになる。

次に出身地を見てみよう。表1以外にも出身地が判明している人物がいるので、それを加算したうえで統計をとると、最も多いのが湖南の17名、ついで四川が13名、湖北が10名、河南が5名、浙江が3名、江西、山東が2名、福建、山西、江蘇、安徽、朝鮮が各1名となる。湖南（とくに湖南女子師範学校）、湖北、四川の出身者が大半を占めていたことがわかる。各省からどれくらいの人数が選抜されたかについては、回憶の中に数字が散見する。やはり湖南が最も多く、61名にのぼる³²⁾。江西省では10名が合格した（『女兵』111頁）。山西省は王亦俠ただ1人だった（陳力田、8頁）。四川では一次試験で31名が合格、武漢で行われた再試験で3名が振り落とされ、28名が残った（胡蘭畦、121頁）。

学歴についてみれば、女子師範学校出身者が大半を占める。なかでも湖南と湖北のそれが圧倒的に多い。湖北省立女子師範学校からは教師と学生合わせて30名以上が合格したという（『女兵』136頁）。トップ合格は四川第二女子師範学校の陳徳芸、第二位は北京大学の鄧銘芳と高学歴者が上位を占めたが（『女兵』174頁）、試験では学問的達成度よりはむしろ政治的志向が重視されたようで、必ずしも高学歴者に有利であったわけではない。例えば当時15歳だった黄静汶は初中すら卒業していなかったが、共産党員の兄の影響を受けて共青团に加入し、県婦女協会の組織者として活躍していた。数学や物理では全く手が出ずに、「軍事政治学校を受けに来たのにどうしてこんな問題を出すのか」と答案に書く始末だったが、それでも合格した（『女兵』64-65頁）。鄭味虚はデモクラシーの意味が分からず、試験監督に教えてもらい、それをそのまま解答用紙に書いたというから、試験は多分に形式的だったのだろう（『戦争と女性』上）。したがって女子師範学校出身者が多い理由は、学力そのものの問題よりも、師範学校の学生が革命的な思想に触れる機会が多かったことに求められよう³³⁾。

出身階層については分析に耐える史料がないので、胡毓秀の言葉を引用するに止めたい。「貧乏学生もいれば、まずまずの家庭の娘もあり、金持ちの家のお嬢様もいれば、結婚して封

建的家庭と決裂した者もいた。その絶対多数は小資産階級の出身であった³⁴⁾。」

3 軍校での生活と事件

3.1. 入学＝入隊

入学は多くの女性にとって印象深い出来事だった。女生隊の校址は両湖書院の東隣にある両湖中学であった（『黄埔軍校史料』419頁）。江西の学生は12月中旬に武漢に至り、2月4日に校舎に入った（『女兵』111頁）。四川の合格者28名は斗級營の宿舎から2列縦隊で颯爽と行進して校舎に入った³⁵⁾。その様子は道行く人々の目を奪ったが、それは彼女たちが断髪していたからであった。当時、断髪の女性はまだ珍しく、一部の進歩的な女子学生がしていたにすぎない。彼女たちは断髪により、停学などの処分を受けることすらあった。四川の学生は、兵となるには辮子（お下げ）は不要だとして集団で断髪していた（胡蘭畦，122頁）。湖南の学生も、軍人として先ずなすべきこととして断髪を思いつき、理髪師をつれてきて集団で断髪した。断髪した髪型は「陸軍頭」と呼ばれた（『女兵』67頁）。入学後、断髪運動がおこなわれて、断髪は女兵のトレードマークとなる³⁶⁾。

2月12日の開校後、女生隊は3つの区隊に分けられた。第一区隊長は楊伯珩，第二区隊長は王展³⁷⁾，第三区隊長は李師竹，特務長は楊時偉，洪英，楊佩蘭であった³⁸⁾。各区隊の下には3つの班が設けられ、学生から班長が選ばれた。班長は、交代で当直にあたり、訓練時に整理と号令を担当し、授業では「起立」「着席」の掛け声をかけて人数報告を行い、毎日日誌をつけるなどの任務があった（『女兵』45頁）。

学生には軍服、軍帽、ゴム底靴、草鞋、靴下、ゲートル、ベルト（すべて男性用）が支給された。彼女たちは着慣れない軍服を身に着けて、はじめて軍人になった実感を味わった。その後、隊長（鄭奠邦）の訓話があり、軍人としての心得、すなわち規律の遵守、命令への服従を言い渡された（『女兵』68，112-113，161頁；『一個女兵の自伝』155-164頁）。その日から早速「軍事化」された生活が始まった。多くの学生が入学のことを回憶するときに「入伍（入營）」という言葉を用いているのも、まさしくそこが軍隊そのものであったからである。

3.2. カリキュラム

授業は政治課と軍事課に分かれ、軍事課はさらに学科課程と術科課程に分かれていた。入伍期には、政治課が1日1回、学科と術科がそれぞれ2回あった。入伍期が終ると、政治課が週14回に増え、残りが軍事課に充てられた³⁹⁾。政治課では、惲代英が労働者運動、学生運動、マルクス＝レーニン主義の基礎知識を教え、許徳珩が「共產主義ABC」を論じた。このほか三民主義、建国方略、社会進化史等が講じられた。また女生隊だけに行われたものとして、女

性解放や世界女性運動史などの授業があった。外部から講師が呼ばれることもあり、毛沢東、郭沫若、陳独秀、宋慶齡、周恩来などの著名人が講演した。軍校全体の講演は講堂や運動場で行われたが、女生隊単独の授業は隊の教室で行われた。

軍事の授業では『歩兵操典』『射撃教範』『軍中勤務令』などの教材が用いられた。軍事操練は「気をつけ」「休め」から始まり、班、排、連、營、団といったユニット毎の教練へと進んでいった。營以上の教練は校内では実施できず、校外の広場で行われた⁴⁰⁾。3月末か4月初に始めて銃を支給された。女子学生にとって、銃は重く、背の低い者にとっては自分の身長より高いことさえあった⁴¹⁾。銃を受け取った時の喜びはとても大きく、胡毓秀などはこれでようやく名実ともに革命軍人になったと感じたのであった（『女兵』119頁）。以後はより実践的な訓練、すなわち実弾射撃、刺殺、投弾、銃をかついでの匍匐前進などが行われた。回憶の中で強調されるのは、こうした操練が男子学生と全く同じように行われたという点である。体力のない女性、殊にかつて纏足していた危拱之のような女性にとって、重い銃をかついでの訓練は男子学生以上に厳しいものであった。生理中の女子学生は赤い印を腕につけ、それで一部の訓練を免除されることになっていたが、彼女たちはそうした優遇措置を利用するのを肯んじなかった⁴²⁾。

3.3. 内務と軍隊生活

内務とは宿舎での様々な仕事、たとえば寝台の整理や掃除などを指す。日本語からの借用と思われるが、日本軍のような陰湿なイメージは、少なくとも回憶の中には見られない。近代中国の軍事指導者の多くが日本の陸軍士官学校出身であったから、用語のみならず、生活の面に至るまで日本の軍隊の影響が見られる⁴³⁾。

軍校生活を秩序付けていたのはラッパの音である。起床、食事、訓練や授業の開始、就寝などあらゆる行動はラッパの音で知らされた。起床は4時半で⁴⁴⁾、それから10分の間にゲートルを穿き、シーツを畳み、洗顔、歯磨きをして、運動場に集合する。これを10分でこなすのは最初のうちはなかなか難しい。服装に乱れがあってはならないし、シーツもきっちり畳まないといけない。たとえば、帽子は徽章が鼻の真上にくるようにかぶらねばならず、ベルトもバックルが真ん中にこないといけない。ゲートルはしっかりとしめ、外側の紐は、すべて「人」字型に締め上げねばならない、など細かな規定があった。また服にはかならず階級章をつけておかねばならなかった。

全員が運動場に集合すると点呼が行われる。この間に宿舎がチェックされ、少しでも乱れがあれば罰則が課せられた。運動場を走った後、朝食となる。食堂には「軍令如山」「党紀似鉄」という対聯がかけられている。6人1テーブルで、教官の合図で箸を取り、10分後の合図とともに箸をおかねばならない。これまで早食いの習慣などなかった彼女たちにとって、慣れるまでが大変だった。最初のうちは、食べ物をポケットにしまいこむものもいたという（呂儒貞、

138頁)。食事は悪くなく、昼と夜には四菜一湯の食事が出された。午前4時間、午後4時間はそれぞれ授業と訓練がある。夕食後は訓話があり、それから消灯までは自由に過せる。自習するものもあれば、討論会を開くものもいた。金曜日、土曜日の晩は文芸娯楽活動が行われ、また共産党員、共青团員はそれぞれ党、団の会議に出席した。就寝時には、衣服を指定の場所におき、ゲートルは帽子の中に入れて枕の右側においておく。21時半に点呼があり、22時に就寝（呂儒貞、139頁）、消灯後の私語は一切禁止であった。夜間に隊長が見回りをして違反者がいないかチェックをする。

一週間のスケジュールは次の通りである。月曜日の午前は軍校の学生、および学兵団員が集まって、鄧演達や惲代英の政治報告を聞いた。金曜日まで授業があり、土曜日の午前は射撃、午後は衛生や銃の手入れを行った。銃は毎日きれいに磨かねばならず、錆が生じたら罰則が課せられる。日曜日の午前は内務や銃の手入れをし、午後は自由で、許可を得れば外出でき、また来客と会うこともできた⁴⁵⁾。罰則を犯した場合には、外出許可が下りないというペナルティーが課せられた。

3.4. 血花世界事件

1927年3月10日、湖北全省総工会が漢口の血花世界で宣伝大会を開催し、蒋介石の軍事独裁に反対するスローガンを叫んでいた。そこへ軍校の政治大隊の学生が闖入し、労働者4名を殴打し、公安局と総司令部武漢行営に連行するという事件が起こった⁴⁶⁾。おりしも国民党二届三中全会が開催されており、この事件を重視した党はただちに調査委員会を発足させ、翌日に惲代英から調査報告がなされた。軍校でも善後処置を話し合う会議が開かれた。この事件は「少数の事理に明らかでない分子」が引き起こしたものであり、党が養成する学生と国民革命の主要戦力である労働者との間を引き離そうとした、蒋介石支持派（国民党右派）の姦計とみなされた。事件の処理に引き続いて、党内肅清運動がおこなわれ、118名が党籍・学籍剥奪や警告の処分を受けた（『軍校』57-60頁）。

この事件には女生隊隊員もからんでいた。胡蘭畦が現場に居合わせた学生から聞いたところによると、事件の概要は以下の通りだった。区隊長は会場に着くといったん部隊を解散した。血花世界は娯楽場であり、学生たちは自由に参観や休息をした。映画館で何人かの労働者たちが「打倒蒋介石」と黒板に書いているのを見た軍校五期生の蒋介石擁護分子徐中齊、陳楷らが労働者に殴る蹴るの暴行を加えた。六期生の羅瑞卿らが阻止しようとしたが、止めなかったのではなかった。しかし羅瑞卿、符浩、谷万川は群衆の支持を得て、陳らをしばりあげ、軍校に連れ帰って監禁した。女生隊隊員の劉若華ともう1名は徐・陳に加担したため、軍校に戻ってきた後、指導員の唐維淑に呼び出され、監禁された（『胡蘭畦回憶録』146-147頁）。

血花世界事件は蒋介石擁護派と反対派の抗争として描かれ、かつそのように処理されたのだ

が、はたして本当にそうだったのだろうか。無党派の呂儒貞は「聞いたところでは、何人かのごろつきが労働者になりすまして、わが分校の男子学生をなぐったとのことである」と言っている（呂儒貞、143頁）。もしこの証言が正しければ、軍校内の右派を攻撃するために事件が利用されたことになる。この事件が問題となるのは、現場に居合わせたものの証言がなく、現存する回憶がすべて他人から聞いた情報に拠っていることである。そして情報の多様性から、逆に、この事件を受容した側の混乱が窺われるのである。

軍校の学生の一部は、校長である蒋介石がどうして突然、「新軍閥」「反革命」として非難されるのか、そして規律に厳しい軍校の教官がなぜ蒋介石打倒を擁護するのか、理解できなかった。血花世界事件のすぐ後で、学校が校長制から委員制に変更になった。蒋介石の影響力を削減するために採られたこの措置についても、様々な見解が入り乱れた。呂儒貞が列挙する意見は共産党に賛成するものから反対するものまで様々だが（中には当時の発言としてはありえないものも含まれているが）、彼女たちが多様な思想の持ち主であったことをよく窺わせる（呂儒貞、144頁）。

蒋介石擁護派と反対派の暗闘は軍校設立当初から存在した。男子学生に限って言えば、黄埔軍校から来た第五期生には蒋介石に忠誠を尽す者が多かった⁴⁷⁾。彼らは黄埔同学会や孫文主義青年団のような団体を通じて「反革命」陣営の拡大につとめていた。血花世界事件は両者の暗闘が学校の外に出た数少ない事件であるが、それは起こるべくして起こったのである。

男子学生については、左右両派の闘争の様子が多少なりとも明らかにされているのに対して、女子学生については、「女生隊の中の少数は消極的で落伍した」（『女兵』59頁）という証言や、右派との闘争に関する記述（『女兵』103、117-118、149頁）にその一端が窺われるだけで、詳細はわからない。しかし「我々と右派の同学との論争は、たえず発生していた」（『女兵』118頁）というから、女生隊内での対立も構造的で根深いものがあつたはずである。思想的に未熟な若者の集まりであつた女生隊が、軍校あるいは武漢における政治勢力地図を反映して、後世語られる以上に雑多な集団であつたことは、むしろ当然のことであろう⁴⁸⁾。我々は右派学生の回憶も落伍者の回憶も読むことが出来ない⁴⁹⁾。回憶を残しているのは、全学生の1割強に過ぎないし、履歴がわかるのも2割5分に過ぎない。逆に3割の学生は名前すらわからないのである。

陳毅は「軍校の学生の中で、中共黨員は少なくなく、党に同情的な分子はさらに多かった。右派の勢力は小さかった」、周仏海は「新たに募集した学生〔第六期生〕の三分の二は共産分子であつた」、朱其華にいたっては、「武漢分校の色彩は終始濃厚であり、一般人は分校をC.P.〔中国共産党〕一色だとみていた」と言っている（『軍校』15頁）。一方、女生隊隊員の譚樂華は「学生のうち共産黨員、共青团員、国民党左派が多数を占め、右派は少数だった」（『女兵』103頁）、区隊長兼共産党支部書記の楊伯珩は「共産黨員と〔共青〕団員は全人数の三分の一くらいを占めている。国民党にはまた左派と右派がある。さらに国家主義派と孫文主義学会

があり、状況は複雑である」(『女兵』115頁)と述べる。もし後者が事実とすれば、女生隊の共産党員は一般に考えられているよりかなり少ないことになる。「中央軍事政治学校武漢分校は完全にわが党の指導のもとにあった」(『軍校』25-26頁)という回顧は、大まかな状況を示しているであろうが、度重なる圧力にもかかわらず、国民党右派が存在し続けたことはもっと留意されてよい。また、「私は政治理論の書籍をほとんど読まず、各方面の認識も十分ではなかったで、どの党派にも参加しなかった」(『女兵』156頁)と素直に語る呂儒貞のような無党派層の存在も見逃してはならない。女生隊の記述はあまりに一面的すぎるのである。

3.5. 西 征

軍校を取り巻く状況は悪化の一途をたどっていた。上海では蒋介石が四・一二クーデタで共産党を弾圧、そのわずか三日後には広州でも大虐殺が繰り広げられた。国民党左派・共産党と国民党右派との確執は軍校にも影響を及ぼした。5月には国民革命軍鄂軍第一師師長夏斗寅が謀反を起こし、武漢に進攻するという事態が起こった。国民革命軍の主力は河南での戦線に動員され、武漢には葉挺の部隊(第十一軍第二十四師)しか駐屯していなかった。武漢国民政府は新たに中央独立師を組織して、葉挺にその指揮をゆだねた。軍校の学生は中央独立師に組み込まれ、思いがけずも実戦に投入されることになったのである。

中央独立師の編制は次の通りである。師長・侯連瀛、副師長・楊樹松、党代表・惲代英、参謀長・宋漢英、政治部主任・施存統。全体は3つの団に分かれ、第1団は軍校第五期工兵大隊、炮兵大隊からなり、団長は張鴻儒。第2団は第6期政治第1大隊、第2大隊からなり、団長は藍騰蛟。第3団は学兵团からなり、団長は史文桂。女生隊は病人や纏足経験者を除いてほぼ全員が参加し⁵⁰⁾、本隊に1日遅れて出発した。事前に食料袋、草鞋、三色帯(自分の命を捧げることを示す印)、軍用毛布を支給されたが、銃は支給されなかった⁵¹⁾。

女兵たちが駅のプラットフォームでまず目にしたのは、多くの負傷兵だった。女生隊隊員のうち20名が医務処に配属され、負傷兵の看護を行った⁵²⁾。後に彼女たちは各部隊に配属された(『女兵』138頁)。女生隊の任務は救護、宣伝、通信などであった。宣伝隊は陸更夫が率い、陶桓馥が小隊長であった。陶は常に墨汁を携え、標語を書いて回ったと回憶する(『女兵』41頁)。また王容箴は参謀処で暗号電報の翻訳にあたった(『女兵』180頁)。このほか、行軍先の各地で農会、工会、婦女協会を組織あるいは再建し、群衆大会を開いて土豪劣紳の罪状をあげ、財産没収、さらには処刑をも行った(実際に手を下すのは男性兵士であったが)。女性たちの訴えを聞いて、簡易裁判を開くのも女兵の重要な任務であった。女性に対する宣伝の重点は纏足解放と断髪に置かれた。また帝国主義や軍閥の罪惡をわかりやすく説明するために、自作自演の劇をたびたび演じた。

女生隊隊員たちは、当初このような役割を演じることを想定していなかった。「我々女生隊

は戦闘隊を編成して前線に行くことを強く要求した」（『女兵』71頁）にもかかわらず、後方勤務に配属されたのである。男性兵士とともに銃を持って敵を倒すことを想像していた彼女たちにとって、これは満足のいかない措置であった。戦闘至上主義ともいえる彼女たちにとって、炊事夫などは自己と同列にみなすことができなかった。施存統から彼らは必要不可欠な戦闘構成員で、ともに革命のために戦っているのだから見下してはいけないとの指摘を受け、認識を改める場面もあった（『女兵』35頁；『胡蘭畦回憶録』166頁）。

軍校では男女ともほぼ同様な教育を受けていたにもかかわらず、ひとたび戦地に赴けば、女生隊にはそれまで教えられたこともなく、またさして重視されてもいなかった救護や通信などの任務を押しつけられた⁵³⁾。しかしそれでも女兵の活躍は、謝冰瑩の筆を通して国内のみならず、国際的にも知られるところとなった。「兵」というものを、武器を手にして敵と戦う者という狭い意味で用いるならば、彼女たちは兵まであと一息のところまで来ていた。戦闘員としての女兵は、10年後にはもはや珍しいものではなくなっていた。

3.6. 卒業後の女兵たち

西征から凱旋したとき、武漢の政治状況は一変していた。国共合作の破綻は、もはや秒読み段階に入っていた。7月15日、汪精衛が「分共」を宣言、7月18日には第五期の学生が離校を迫られた。軍校は張発奎の第二方面軍軍官教導団に改編され、楊樹松が団長、季方が参謀長となり、1,700名余りが南湖の営房に移った（『武漢国民政府史』241頁）。この日、両湖書院で第五期炮兵大隊、工兵大隊、女生隊の卒業式が行われた。

女生隊隊員の進路について鍾復光は次のように言う。一部の学生には家に帰って避難することを許したが、大部分の学生は家に帰るのを望まなかった。第十一軍（葉挺）、第二十軍（賀龍）に配属されたものは、文書、通信、宣伝、医務にあたり、南昌蜂起に参加した。第二方面軍軍医処、軍官教導団に配属されたものは広州蜂起に参加し、このとき女兵たちは白兵戦を戦った。さらに地下闘争に送られるものもいれば、胡筠のように帰郷して武装闘争を組織する者もいた。また若干名はソ連に送られたという（『女兵』27頁）。

「部隊と行動をともにしたいものは部隊に配属し、家に帰って暫く避難したい者はそうしてかまわない」と記した黄傑は「張発奎の教導団に編入するよう要求した」。そこへ母危篤の電報を受け取り、家に帰ったところが実は嘘だったことがわかり、戻ろうとしたところ、荊州第一小学校へ派遣された（『女兵』59頁）。呂儒貞は惲代英が「〔帰るべき〕家のあるものは家に帰ってもよい。帰るべき家のないものは、部隊とともに行動する」と言ったという。呂は家に帰り、以後は革命の戦列から離れたらしい。『女兵』に回憶を寄せた者には、生没年、出身地、履歴などの情報が脚注に記されるが、呂と陳徳芸のみ脚注がない。陳もまた家に帰って革命の戦列から離れたのだろう⁵⁴⁾。譚浩郁は謝冰瑩、黎樹蓉、王容箴、謝漢藻らとともに家に戻るよ

う「安排（手配）」されたという（『女兵』162頁）。謝冰瑩は「足が痛くて武漢に止まっていられず」黎らとともに長沙に戻った（『一個女兵的自伝』216頁）。

実はこの問題は、隊員の所属組織との関係で考えなければならない。胡蘭畦は同級生たちの「大部分が軍服を脱ぎ、旗袍を着ることを余儀なくされた。共産党員と共青团員は自ずから組織の手配があり、依然として一つのまとまりをなしていた。組織に所属していないものはばらばらの砂のように、それぞれの道を進んでいった」（『胡蘭畦回憶録』175頁）という。つまり鍾復光の証言は共産党関係者のみに妥当するものであって、それ以外の者は除外されているのである。組織の後ろ盾がないものは5元の国庫券を手し、家に戻らざるを得なかっただろう。

家に戻った隊員はどうしただろうか。胡筠のように、故郷で武装蜂起を組織し、あくまで革命に従事しつづけたものは、共産党員でも少数派に属するのではないか。謝冰瑩は家に帰るなり親に監禁された。何度か逃亡を試み、4度目にしようやく故郷を離れることができた。謝漢藻も結婚を拒んだために監禁された。謝冰瑩は3度目の逃亡が失敗した後、謝漢藻と会って話をしたが、謝漢藻はもはや闘争を続ける意欲を失っていた。革命から「落伍」した彼女は結婚を受け入れ、3児の母となった。施祖謙もまた「家庭生活」に迫られて、革命から離れた（『女兵』141頁）。当時の状況のなかで革命に従事し続けるには、強靱な意志が必要であった。革命に復帰したもののほとんどは、故郷を離れざるを得なかった。しかしこのような女性は量的に言えば少数派に属したのではないだろうか。卒業後、なんらかの形で共産党と関係を持ったことがわかるのは40名ほどにすぎない⁵⁵⁾。軍校で共産主義の洗礼を受け、一度は封建社会に背を向けた彼女たちも、その多くは再び封建社会に飲み込まれてしまったのである。

4 女性兵士の創出とその意義

4.1. 「女兵」像と謝冰瑩

ここで視点を移して、女兵がどのように見られていたか、また女兵自身は自らをどのように見ていたかを検討してみたい。

朱徳夫人として、また女性兵士として有名な康克清は、童養媳だった頃、仲間の前で次のように語ったと回想している。

北伐軍には女兵隊があって、衣食の差配をし、さらに武術の訓練をし、書物を読み、字や道理を学ぶことができる。もし私たちがみな女兵になったら、それこそ〔現在の苦境から脱する〕活路ではないか（『康克清回憶録』12頁）。

童養媳という辛い境遇にあった女性たちにとって、女兵はそんな境遇から逃れることのできる

数少ない選択肢だった。この一節の直前で、彼女たちは尼になることを話していたが、前近代の女性たちにとって、出家と自殺しか苦痛から逃れる方法がなかったことを思えば、女兵になることは非常に魅力的だったにちがいない。康にとって「女兵隊」は単なる軍隊ではなく、有用な知識を身につけ、自分の境遇を変えることを可能にしてくれる学びの場であった。しかし田舎にいた彼女たちは、どうやって女兵になるのかわからず、北伐軍の船を待ったが、空振りに終わった。

康克清のような好意的な反応は、少数派だった。謝冰瑩は従軍先の嘉魚でのエピソードを次のように記す。

一人の杖をついた老婆が言った。「わたし八十歳になるが、こんな大脚をして、髪がなくて、軍服を着た女をこれまで見たことがない⁵⁶⁾。」

田舎の女性たちは女兵たちを、もし戦争で死んだら両親はどうするのかと気遣う。謝冰瑩は、革命や大衆の利益のために死ぬのなら望むところだと答えたが、おそらく理解はされなかっただろう。女兵たちはどこでも注目の的となり、あるいは歓待をうけ、あるいは猜疑の眼差しに囲まれた。多くの農民にとって女兵は珍しい、あるいは単に理解不能な存在であった。一方、男性の場合、あるものは好奇のまなざしでみつめ、あるものは礼教を持ち出して風紀の乱れを懸念した。男性とともに戦う姿を思い浮かべるものは極めて稀であったし、そのことを評価するものはさらに少なかった。

次に女兵の自画像を謝冰瑩に焦点をあてて検討してみたい。「女兵」という名詞を一躍知らしめたのが、謝冰瑩が前線から『中央副刊』に投稿した一連の日記で、1929年に出版された『従軍日記』であった。この書は発売後1か月以内に1万部が売れ、19版を重ねるベストセラーとなり、謝冰瑩は女兵・作家として知られるようになる。1936年には『一個女兵的自伝』が出版され、最初の3千部は4か月で売り切れた。『一個女兵的自伝』のメインテーマは封建的家庭への反逆であり、女兵はその一齣に過ぎない。それゆえ林語堂父娘が翻訳した英語版のタイトル「Girl Rebel」、その中国語版のタイトル「女叛徒」は、実は書物の内容にふさわしいタイトルであった。しかし謝がよりこだわったのは女兵としての自分であった。『一個女兵的自伝』には草むらのなかで銃を握り締めている作者の写真が「前線上の作者」というキャプションを付して載せられている（図1。これが本当に前線で撮影されたものかどうかは疑わしい）。この写真を選んだこと自体、作者が自分をどのようなものとして演出しようとしていたかわかる。それは女兵、しかも武器をもって戦う女兵戦士であった。

新居格は謝冰瑩に会ったときの様子を次のように描いている。



図1 前線で銃を持つ謝冰瑩（『一個女兵的自伝』130頁より）

わたしの見たところ、彼女は決して美貌の人ではなかったが、さうとて醜いのではない。著しく意志的で、負けじ魂といったものが彼女の顔面表情によく現はれてゐた。それは支那の女に概して見る顔ではなかった。……私が「あなたは女の兵士だつたさうですが、従軍して炊事でもしてゐたのでせう」と訊くと、「いゝえ、銃を擔いで戦つたのです」と答えた。……わたしは詩人冰心女史に支那の典型的なインテリ女性を知った。謝冰瑩はそれとは違ふが等しくモダン・チャイナの生んだもう一つの型であるを見た（『女兵士の自伝』序）。

いかにも「モダンガール」の生みの親らしい筆振りであるが、女性兵士と聞いて炊事でもしていたかという思い込みと、それを否定して戦闘員であったことを強調する謝との対比が興味深い。炊事夫を見下していた女兵が逆に炊事婦扱いされたのである。こうした反応は日本の知識人に限られなかった。ある中国人兵士は「お前たちは俺たちの服のつぎはぎや洗濯をするために派遣されたんだろう」（『女兵』199頁）と女兵に語った。曹誠はこの味方の兵士を「反動的兵痞」と決め付けているが、これが当時の兵士の普通の認識であった。

一方、国民党湖北省支部婦女部と省婦女協会が、西征に向かう女生隊に「殺尽敵人」と書かれた旗を贈ったように、革命を推進する女性たちは戦闘員としての女性兵士というイメージを作りあげていた（『女兵』26頁）。それは女性解放、男女平等の一つの証、一つの到達点であった⁵⁷⁾。女生隊隊員は男性兵士と同様に完全武装して、銃を持って敵を殺し、男性兵士と肩を並べて戦うことを要求したが（『胡蘭畦回憶錄』162頁）、出征時に銃を支給されなかった。女兵は

その意気込みとはうらはらに、前線の後方で、宣伝、通信、救護活動に甘んじた。そして帰還後には、敵と生きるか死ぬかの戦いができなかったことにながかりしたのである（『女兵』130頁）。ここに、自分たちが一人前の兵士であるという自負と、そのことがなかなか認めてもらえないことへの苛立ちが窺える。女兵としてのプライドと現実とのギャップは彼女たちを苦しめた。彼女たちは革命の大義をもって自己の位置を正当化しようとしたが、現実の革命はあくまで男性を優先したのである⁵⁸⁾。

女性兵士の創出は、冒頭に掲げた会話に象徴的に示されるように、従来のジェンダー観を突き崩すものであった。こうした見方の根底には、女性兵士が武器を手に取り前線で戦うというイメージ、すなわち女性性の対極にある戦士としてのイメージがある。映画『大浪淘沙』で描かれるのは、軍事訓練の光景であって、教室での授業風景が映し出されることはない。それは女兵自身が創り上げたイメージであるし、また後の紅軍の女性兵士のイメージでもある。女性兵士の創出は確かに破天荒な出来事であったが、当時の国民革命の文脈で言うところの決して破天荒なものではなかった。国民革命は女性をもその一翼とみなし、政治参加を促した。北伐の進行にともなって戦線が拡大していくなかで、女性の動員が政治活動から軍事活動へ、後方支援から戦闘参加へと拡大するのは必然であった。しかし女性に期待されたのは、あくまで補助的な役割、言葉をかえて言えば、女性らしい仕事か、女性に対する宣伝工作など女性にしかできない仕事であった。その意味で女性兵士の創出は、当事者の意識は別にして、女性役割の拡大であって、女性役割の破壊、男性役割への転換をもたらすものではなかった。

4.2. 女兵とジェンダー

当時の女性解放運動で支配的だったジェンダー観は五四時期に形成されたものである。国家の解放を個人に優先させる共産党の見解とは逆に、彼女たちはまず個人の解放を求めた。五四時期のジェンダー観の特徴は、それが女性の男性化を目指すもの、言い換えるなら、女性性の放棄であったことだ⁵⁹⁾。男女平等は、就職や教育の機会に止まらず、服装や髪型といった外見にまで及んだ。断髪はその現われの一つであるが、ここでは他の事例を取り上げたい。

女生隊の軍服には赤字で「W」と書いた腕章が縫い付けられていた。これはWoman、すなわち女性であることを示す標記であったが、学生たちは大いに不満を持っていた。ある日の生活会でみなが鄭隊長につめよった。鄭隊長は、男女を区別しているだけで、それ以上の意味はないと答えたが、それではおさまらなかった。「我々女子学生は女生隊にいて、男子学生は男生隊にいて、これでもう十分区別しているではないか」「どうして〔女性〕指導員の軍服にはW字がないのか」「そんなことはどうでもいい。ただ私たちの軍服のW字は取ってしまうべきだと言っているだけだ」「何がかまわないものか。指導員の彼女は官で、私たちは兵である。官はこの字をつけなくてもいいのに、兵はどうしてこの字をつけなくてはいけないのか」

こうして鄭隊長は上司に報告すると言わざるを得なくなった⁶⁰⁾。教官が提案した生理期間中の優遇措置を拒んだり、ゲートルの色を男子学生と同じものを要求するなど、女子学生たちは女性であることを示すいかなる徴も忌み嫌った。彼女たちは「女兵」ではなく「兵士」になろうとしたが、そうすればするほど、女性であることを意識せざるを得なかった。

平時にはなお男女平等の実現を夢見ることができたが、戦時には男女の性別役割が極端な形で現れた。西征の際、一部の女子学生は救護を担当することになったが、彼女たちは救護の授業を受けていたわけではなかった。政治班に所属する女生隊が宣伝工作を担当するのは至極当然であったが、通信や救護を割り当てられたのは、軍上層部の性別役割分業規範が作用したとみられる。こうした規範は従軍した女性の中でも働いていた。女子北伐救護宣伝隊の郭徳潔は、「われわれ女子は銃を担いで戦争をすることはできないが、極力銃後の作業を担当して国民の一分子としての責任を尽さねばならない」（長沙『大公報』1926年8月1日）といっている。

国民党右派や国民革命に批判的な人々は、女兵を女性性からの逸脱とみなした。また、一般人も女兵に対して、拒否または好奇のまなざしを向けていたが、それは「反動派」の利用するところとなった。4月2日、マッチ工会の工人劉国棟が、5月1日に漢口市婦女協会が裸体游行をするという「デマ」を流した。劉はただちに婦女協会へ拘引され、公安局に転送された⁶¹⁾。調べによると、彼は女工や婦女協会に対する個人的な恨みを晴らすためにデマを流したのだった。ところが劉を捕まえただけでは、デマがおさまらなかった。省婦女協会は秘密裏に調査をおこない、劉君玉、尹鳳初、湯蓮英を捕まえた。鍾復光の回想によると、国民党右派が娼婦を買収して裸体隊を組織し、裸体游行の準備を整えていた。彼らは娼婦を黄埔軍校の女生隊にしたてあげようとしていた⁶²⁾。「裸体游行」のインパクトは大きく、武漢から上海へ行った人が、かの地で必ず聞かれたのは「武漢ではいつも裸体游行をやっているという話だが、本当か」ということであつたし、中華婦女同志会は反対声明を発表している⁶³⁾。また、梁啓超は子供たちにあてた書簡で「新聞に掲載された、婦女が何度か裸で練り歩いたというのは、紛うかたなき真実であり、およそこうした類の行動は、まことに挙げればきりがなし」と記している（『梁啓超年譜長編』1126頁）。裸体游行のデマは海外にも飛び火したが⁶⁴⁾、こうした報道を喜ぶ心理は（男性）世界共通といってよからう。乱婚を想像させる「公妻」「共妻」などは武漢国民政府を攻撃する際に頻繁に用いられた。「風化」、とりわけセクシャリティに関わる攻撃は、中国社会において極めて効果的であった。それゆえ軍校の教官たちは「男女の別」に気を配ったのだが、それが学生のジェンダー観と衝突したのである。

「反動派」は革命に参加する女性に対して、精神的攻撃だけでなく、肉体的攻撃をも加えた。攻撃の矛先は婦女協会に向けられ、とりわけ断髪した女性が対象となった⁶⁵⁾。夏斗寅の敗残部隊が湖北省羅田で白色テロを繰り広げた際、断髪女性の乳房に針金を通し裸で街中を引き回した。これはあたかも彼らが夢見た裸体游行の実現である。また湖南省の上游では、乳房が切り

取られ、胸や腹を刺され、全身がむくんだ断髪女性の死体が十数体みつまっている⁶⁶⁾。もちろんこれらは反動派に対する憎しみを植えつけようとしたメディアの誇張かもしれない。しかし、それが事実として受け取られる素地は十分にできていた。各地で反動派との抗争が展開されていたが、反動派は憎しみの対象を農民協会と婦女協会に向けていた。女性が女性として政治的に可視化される前は、反対派に対する報復、あるいは性的欲求の対象として女性が暴力にさらされることはあったが、自身の政治的行動・態度が理由で多くの女性が犠牲になることはなかった。政治の大衆化は必然的に大衆レベルでの紛争の拡大と先鋭化をもたらし、女性もそのなかに巻き込まれることになった。反動派は、女性性の否定によって否定された自分たちの世界を回復するためにも、女性性を否定した女性を徹底的に否定しなければならなかったのである。

5 お わ り に

「はじめに」で掲げた問題点のうち、女性兵士の実像は本文で詳しく述べたので繰り返さない。ここでは第2と第3の点、すなわち社会主義との関係、佐々木のモデルの中国への適用可能性について触れておきたい。

ソ連で女性兵士が創出され、正規軍に所属して戦闘部門を担ったことについて、佐々木は、社会主義国家であるがゆえに男女の障壁が低かったこと、女性の社会進出が進んでいたこと、を指摘した。しかし、社会主義国家となる以前に、ロシアにはすでに女性兵士が存在していたから、社会主義だけで女性兵士の創出を説明するのは明らかに不十分である。この点は中国も全く同じである。中国には女性の従軍の長い伝統があり、二十世紀に限っても、辛亥革命時の女性兵士は社会主義ではなく民族主義によって鼓舞されていた。また、女性兵士創出の条件となるジェンダー規範の弱体化も、五四新文化運動に由来するものであった。黄埔軍校の各分校のうち、武漢だけが女性を受け入れたのも、そこに国共合作の政府があり、ソ連の顧問がいたからではなく、そこが広範な大衆を巻き込みながら高揚しつつあった国民革命の中心地であったからである。社会主義に女性兵士の創出を促進する側面があったことは事実であるが、それを女性兵士の創出の原因とするのは正確ではない。すなわち、中国・ロシア両国が社会主義を受容する条件を備えていて、それが女性兵士の創出につながったということではできても、社会主義が女性兵士を創出したということはできないのである。

佐々木は戦争中の女性の動員形態として、母性動員（従軍看護婦）、労働力動員（軍需産業女性労働者）、娼婦性動員（従軍慰安婦）、兵力動員（女性兵士）をあげる。そして女性兵士を戦闘領域／非戦闘領域と正規軍／非正規軍という2つの軸にそって定義づけた。戦闘領域か否かは、戦闘員か否かと同義で、非戦闘員とは、具体的には銃後で事務職についていたアメリカの女性

兵士のような存在である。では軍隊とともに戦場に赴き、政治工作や救護・通信工作をおこなった女生隊はどう定義されるだろうか。あえて分類すれば、正規軍・非戦闘員ということになるだろうが、最前線にいたわけではないにせよ、銃をもって従軍した女生隊と、スカートをはいでデスクワークに勤しむアメリカの女性兵士を同じ範疇に入れることに違和感を覚える。

佐々木はナショナリズムの強弱とジェンダーの強弱を軸に、ナショナリズムが強くジェンダーが弱い第二象限を「戦士としての女性兵士創出の可能性」と位置づけた。また、ナショナリズムが弱くジェンダーが弱い第三象限を「女性兵士創出は想定されず、社会主義の理念型（インターナショナリズム＋女性解放イデオロギー）」と位置づけた。しかし、打倒軍閥、打倒帝国主義を掲げた国民革命におけるナショナリズムの問題は単純に扱えるものではない。同じ中国人であっても軍閥は打倒の対象であり、外国人といってもソ連や被抑圧民族は連帯の対象であった。謝冰瑩は『一個女兵的自伝』134頁で「当時、全世界の十二億五千万の被压迫民族の解放をみずからの重荷として自分の肩に担わないものがいたろうか」と記したが、のちに「当時、国民革命の完成と富強な中国の建設をみずからの重荷として……」（『謝冰瑩文集』上、60頁）と書き換えた。ここに国民革命におけるナショナリズムの屈折を見て取ることができよう。それは単なる民族主義や国家主義の範疇に収まらないものであった。国民・国家を創出する過程において、インターナショナリズムによってナショナリズムが正当化されるような事態が生じていた。もちろんそれは言葉の厳密な意味でナショナリズムやインターナショナリズムといえないかもしれないが、両者が対極にあると考えるのでは実態に合わない。

さらに、戦況の進展を国内／国外と前線／銃後という指標から分析することも、中国にはそぐわない。1927年当時、中国はまだ統一された主権国家でなかった⁶⁷⁾。北伐は総力戦といえるものではあったが、対外戦争ではなかった。そして戦況の悪化が女性兵士創出を導いたという佐々木の結論とは反対に、国民革命軍が破竹の勢いで北上し、武漢を攻略した後、すなわち戦況の高揚期に女性兵士が創出されたのである。

中国の事例は、佐々木の類型を相対化する視座を提供してくれる。女性兵士創出のメカニズムを解明するには、より多くの比較の対象を設定すると同時に、それぞれの対象において歴史的文脈に留意しつつより深い理解を得ることが要請される。そうすることで、初めて比較が意味をもち、類型も洗練されていくだろう。

注

- 1) 女性の従軍の歴史については、『女子従軍史』を参照。
- 2) 女子北伐敢死隊については、杜偉「上海女子北伐敢死隊」（『辛亥革命回憶録』4、1963）を参照。女子軍が解散されると、元兵士たちは参政権運動にエネルギーを注ぐことになる（小野和子

「辛亥革命時期の婦人運動——女子軍と婦人参政権」（『辛亥革命の研究』小野川秀美・島田虔次、東京 筑摩書房、1978）。

- 3) 『女兵』は軍校の女性兵士に関する最もまとまった基本的史料だが、収録の際にもとの回憶を若干改めている。例えば、初出で提示されていた名前が削除されたり、汪精衛に関する箇所が削除されたりするなど、政治的意図による改悪がま見受けられる。本稿では原史料が利用できるものはできるだけ原史料に依拠するが、出典を示す際には利便性の点から『女兵』を優先することとし、『女兵』と記述が異なる場合に限って原史料で引用する。口述資料から実像を描くというスタンスは、李小江のように、事件がどうであったかよりもその事件が女性に対して及ぼした影響を重視し、口述史を実証史学に対置する立場からすれば、批判の対象となるにちがいない（上野・李、42-43頁）。しかし、李は女性であることをあまりにも一般化しすぎているのではないか。『女兵』で回憶を残すことができた女性たちは、むしろ中国の革命の歴史からすればマジョリティに属する。おなじ女性兵士のなかでも語ることでできる者と、語れない、あるいは語らせてもらえない者がいる。後者の声をくみあげるには、回憶の矛盾や綻びに注目せざるを得ない。もちろん、それは回憶の信憑性を検証するためではない。
- 4) 胡蘭畦「女生隊参加平叛戦闘側記」（『文史資料選輯』65、1981）は1978年9月の日付を持つ。
- 5) 以下の記述は主として『軍校』『武漢国民政府史』に拠る。
- 6) 『黄埔軍校史料』416頁。『包惠僧回憶錄』292頁には、朱霽青の名が見えるが、『黄埔軍校將帥錄』412頁の朱霽青の伝には招考委員になったという記述は見えない。同書606頁によれば、陳維忠も招考委員に任じられている。招考委員のうち、共産黨員は李民治、彭漪蘭、董必武、包惠僧の4名（うち鄭強は共産黨員だが入党年は不明。紀銭は経歴不明）であった。陳公博、李漢俊、劉芬は一時、中国共産党に関係していたが、当時はすでに黨員ではなかった。
- 7) 3月に張が武漢を離れた後、侯連瀛が教育長、楊樹松が学生総隊長となり、5月に周が武漢を離れた後、施存統が政治部主任となった。
- 8) 4月26日に李栄桂が隊長、張桐慎が隊副に任命された（『軍校』30頁；『女兵』61頁）。
- 9) のち鍾復光（当時、施存統夫人）、唐維淑が加わった。
- 10) 学兵团は曾璞（彭鏡秋）が「補充營」と記すように（『女兵』84頁）、軍校に合格しなかった受験生を組織して、急遽つくられた機関である。のち軍校に吸収された。
- 11) 『軍校』27頁。『女兵』25頁では3月末に学兵团の女子学生30余名が軍校女生隊に編入されたという。あるいは男子学生に先駆けて編入が行われたか。なお、3月下旬に学兵团団長の張治中が辞職して武漢を去ったが、組織自体が解散されたわけではなかったようである。
- 12) 当時、蔡暢は広州で女性運動工作に従事していた。9月には婦女運動講習所をつくり、何香凝（廖仲愷夫人）が所長、蔡暢が教務主任に就任した。教員には惲代英らがいた。蔡暢はこの後、南昌を経て武漢に至った。蔡にせよ、ソ連顧問にせよ、以後軍校と関係した形跡はないから、彼らの関与は企画段階にとどまるようである。女生隊の性格を決めたのは、なんといっても代理校長の鄧演達であり、開校後は惲代英であった。
- 13) 『中国婦女運動史』214-215頁；『中国婦女運動歴史資料（1921-1927）』656-658頁。鄧演達は国民革命軍政治部主任、陳銘枢は国民革命軍第四軍第十師師長。2人は1908年に交わりを結んで以来の親友だった。軍人家属婦女救護員伝習所は1925年冬に何香凝、鄧穎超、高恬波らが設立した。
- 14) 『中国婦女運動史』216頁では8名とする。長沙『大公報』1926年8月1日には7名の名が載る。『李宗仁回憶錄』344頁では、女子学生百余名で広西学生女子北伐工作隊を組織したという。

このほか、李省群「回憶大革命時期広西婦女運動」(『広西文史資料』19, 1983)にも簡単な記述がある。

- 15) 長沙『大公報』1926年8月1日。発言を記した箇所では「全余淑」につくるが、他の箇所に「余慧淑」とあり、後者に従う。この他の事例として、1927年5月、陝西では馮玉祥が女子宣伝訓練班を組織した。宣伝、慰労、看護の方法を教授し、訓練期間は3週間から1か月であった(『上海画報』1927年5月27日「馮玉祥軍中婦人記」)。同隊の設立には秦徳君が深くかかわったようである(『火鳳凰』49-50頁)。馮玉祥もソ連と関係が深く、ソ連の政治軍事顧問を迎えていた。なお『北洋画報』1928年7月28日「鄭州所見馮軍中武裝女同志之軍容」には馮玉祥軍の女性隊員(英語のキャプションはWOMAN WAR WORKERS)の写真が掲載されている。一方、国民革命軍を迎え撃つ側である張作霖の安国軍も共産党討伐の宣伝を目的とした女子宣伝隊を組織しようとしていた(『申報』1926年12月18日)。
- 16) 『中国軍人』第6期, 1925。署名は金慧淑であるが、同一人物であることは間違いない。
- 17) 陳力田, 8頁は「鄧演達は衆議を排して女生隊を募集するという破天荒な決定をした」と記し、鄧演達の役割を強調しているが、残念ながら、典拠は示されていない。『回憶惲代英』65頁には、女生隊設置に関して、丁惟汾ら国民党右派、封建勢力、守旧派の強い反対があったと記す。
- 18) 謝は軍校にも小説を持ち込んでいた(『一個女兵的自伝』175頁)。『謝冰瑩文集』所収の『女兵自伝』では、この一節が省略されている。
- 19) 反抗的な前半生や五・三〇事件のエピソードは、彼女が革命へと自然に導かれたことを暗示させるが、それは(謝自身を含めた)のちの「歴史」を知るものの思い込みにすぎない。愛国主義は国民党や共産党の専売特許ではない。両党は愛国主義に訴えることで幅広い支持を獲得できたのであって、愛国主義的行動がそのまま国民党や共産党への参加を意味するわけではない。
- 20) 『一個女兵的自伝』には多くのバージョンがあり、成立の事情は錯綜している。1936年に『一個女兵的自伝』、翌年にその続編の『一個女兵的自伝』中巻が出版された(後者はのちに『女兵十年』というタイトルでも出版される)。林語堂父娘がこの2冊を英語に翻訳し、1940年に*Girl Rebel*というタイトルで出版した。この英語版が逆輸入され、英中対照本、そして中国語版『女叛徒』が同じ年に出版された。香港の書店は勝手に文章をピックアップし、あるいはタイトルや著者名を変えて、海賊版を出版していた。また、謝は『一個女兵的自伝』上、中巻を全面的に改訂し、36万字から22万字に減らしたという。今回参照できたのは、1936年の初版、1939年の日本語訳、1999年の『謝冰瑩文集』、2001年の*A Woman Soldier's Own Story*の4種類である。
- 21) 『一個女兵的女兵』134頁の中では、軍校受験の動機が結婚からの逃避であることについては、謝自身ではなく、兄の口から語られている。最大の悩みであった結婚を解決してくれる、兄や徐特立校長の勧めは非常に魅力的であったにちがいない。謝は、軍校を受験した女子学生の十中八九が封建家庭の圧迫を逃れるためだという一般論を最後に書いているが、そこに自分の経験が政治的に「不純」だったことをカモフラージュしようという心性を見ることはできないだろうか。なお、李小江は女性が歴代の戦争に参加した動機の多くは結婚事情に関係があるという(『讓女人自己說話』7頁)。
- 22) 花木蘭は年老いた父にかわり、男装して徴兵に応じた。十二年にわたる戦闘生活を経て、功成り名を挙げ、天子に召見された。木蘭は官職には目もくれず、家に帰ることを願い、故郷に凱旋する。花木蘭の物語は多くの女性に愛された。表面上は、あくまで女性にとって「孝」が最優先事項であり、やむを得ず父のかわりに「忠」を尽すという体裁をとっているが、二十世紀の女性兵士たちは、家庭の束縛を逃れ、権力を握り、自由に振舞う女性としての木蘭にあこがれたので

ある。自らを花木蘭に擬す女性は多かった。それは「女兵」という言葉が普及する以前における女性兵士の代名詞であった。

- 23) 『二十世紀中国女性史』所収『戦争と女性』上。『二十世紀中国女性史』は1997年に撮影が開始され、1999年に完成した。鄭味虚は歴史家韓儒林夫人。鄭の名は『女兵』や回憶の中で全く出てこない。黄傑もインタビューを受けているが、その内容は自身の回憶「在大革命的洪流中——憶武漢軍校女生隊」（『女兵』所収）と概ね一致する。
- 24) 『黄埔軍校史料』417頁。彭漪蘭は、湖北、湖南、江西、安徽で試験が行われ、軍閥統治下の上海、河南、山東、奉天などでは一次試験が免除され、直接武漢での二次試験への参加が許されたとする（『女兵』18頁）。上海で試験が行われたのは確かなので、彭の記憶違いであろう。
- 25) 長沙『大公報』1926年12月17日。謝冰瑩は、120名の枠に対して3,000名あまりが受験し、結局350名を合格させたとする（『一個女兵的自伝』145頁）。
- 26) 『一個女兵的自伝』145-154頁；『女兵』160-161頁。湖南の学生が反対運動を起こし、学校当局との交渉の末、湖南省出身者の再試験が免除されたとする黄静汶の回憶は誤りである（『女兵』68頁）。
- 27) 『軍校』17頁。婦女政治訓練班（婦女党務訓練班）は1927年2月12日、宋慶齡が中心となって開設された。宋が所長に、ボロディン夫人、惲代英、張太雷らが教員となった。王鳴皋が所属した「黨員志願兵団」とは、あるいは婦女政治訓練班のことか。同兵団は6月中旬に解散し、女生隊に編入されたという（『女兵』144頁）。
- 28) 183人説もしかるべき来源があるはずだが、まだ探し当てていない。『中国婦女運動史』『中国女紅軍』などは183人説を採用している。
- 29) 胡蘭畦、121頁。なお3名の名前は『胡蘭畦回憶録』では削除されている。
- 30) 陳德芸、98頁は李芳につくるが李芬のことであろう。韋澄は名簿では韋成につくる。
- 31) 『胡蘭畦回憶録』147-149頁。『女兵』ではこの箇所は省略されている。
- 32) 『女兵』19頁。この記述は「中央軍事政治学校武漢分校籌備經過概略」に拠ったようである。なお、『一個女兵的自伝』145頁では長沙で行われた一次試験で50名が合格したとする。
- 33) 多くの女子師範学校には共産黨員、国民党左派の教師が居て、優秀な学生をリクルートしていた。また女子師範学校はミッションスクールとは違って、学費が免除されていたことから貧しい家庭の出身者も多く、革命に共鳴しやすい傾向を持っていた。もっとも、当時の女子学生にとって、多くの場合、革命とは親が取り決めた結婚から逃れること、髪を短く切ること、外国の商品を買わないこと、など身近で具体的なことを意味していた。女子師範学校は革命の揺籃の地だったという見方がしばしばなされるが、学生、教師の多くはむしろ保守的であった。革命から歴史を見ると、どうしても女子師範学校の役割が目立つが、純粋に数量的な観点から見れば、そこは依然として良妻賢母教育が支配する場であった。
- 34) 『女兵』117頁。別人による同じ言葉が『軍校』15頁に見える。
- 35) 胡蘭畦、122頁ではこの出来事を1月8日とするが、胡は軍校の開校を1月12日としており、月を間違えている可能性がある（ちなみに陰暦1月8日は陽暦の2月9日で1日違うだけである）。譚楽華も1月に正式に入学したと記すが、同様の間違いであろう（『女兵』102頁）。湖南の胡毓秀は11月末に校舎に入ったと記しているが、第2次試験の日程を考えると、あまりにも早すぎる。
- 36) 胡蘭畦、134頁。各省の受験生たちが、軍人としてなすべきことの第一に断髪を考えていたのは、興味深い現象である（もちろん、髪に未練を感じた学生もいた）。当時、断髪は女性解放、革

- 命参加の徴であった（『女兵』110頁）。台湾の『基隆県志』によれば、北伐時に従軍した女性の断髪を一般の人々がならない、「北兵頭」と呼ばれて流行したという（『中国地方志民俗資料彙編』華東卷、1599頁）。女性の断髪がもっていた意義については、稿を改めて論じたい。
- 37) 王展は男装して東北軍で十数年の間、従軍していた（『女兵』166頁）。
- 38) このリストは彭瀟蘭の記憶に拠っているようである（『女兵』20頁）。呂儒貞は区隊長は「楊王、侯」だったという（呂儒貞、136頁）。胡蘭畦によれば、侯は河南の人、黄埔軍校四期生で、隊副（副隊長）だったという（『胡蘭畦回憶録』136頁）。回憶には、2つの区隊に分けたとするものが散見する。例えば、『胡蘭畦回憶録』135頁は、区隊長は楊伯珩と張麟書であったとする。『軍校』28頁は3区隊といいながら、楊、張の名前しか挙げていない。なお、「特務」はスパイではなく、事務雑用を担当した（『胡蘭畦回憶録』138頁）。
- 39) 『武漢国民政府史』239頁；『軍校』35頁。入営して最初の3か月は入伍期と呼ばれる。また、「三操両講」といって、早朝の訓練と2回の術科・学科があったという証言も残る（『女兵』175、198頁）。
- 40) 黄埔軍校一期～四期の軍事教育科目については『黄埔軍校史料』143－153頁を参照。
- 41) 当時使用された銃は日本の三八式歩兵銃であった（ただし漢陽製）。全長127cm、重量3.9kg（着剣時には166cm、4.4kg）で女性にとっては非常に扱いづかった（『女兵』57、147頁）。
- 42) 『女兵』147頁。女子学生は軍事訓練に熱心だったが、政治班の男子学生は訓練を軽視していた（『軍校』45頁）。
- 43) 教科書として用いられた『歩兵操典』『射撃教範』は日本のその翻案であろう。
- 44) 黄傑は5時起床（『戦争と女性』上）、呂儒貞は6時起床（呂儒貞、138頁）とする。
- 45) 入伍期には月に1回の外出しか認められなかった（『一個女兵の自伝』164頁）。
- 46) 『胡蘭畦回憶録』146頁はこの事件を3月12日の孫中山逝世二周年記念大会のこととするが、誤りである。
- 47) 学兵团でも両派の闘争は見られた。漢口『民国日報』1927年4月6日「学兵团政治部秘書処徐石麟啓事」参照。
- 48) 『女兵』でも何度か言及される映画『大浪淘沙』（珠江電影制片廠、1966）は、男性共産黨員に導かれて政治的に正しい道を歩むという典型的な女兵像を提示している。「反動的な女兵」という表象はありえない。
- 49) 呂儒貞の回憶は数少ない例外である。
- 50) 『女兵』35頁。なお、張益志は100名余りとする（『女兵』167頁）。
- 51) 『女兵』156頁。のちに局地的な戦闘に遭遇してから、ようやく銃を支給された（『女兵』138頁）。
- 52) 施祖謙はこの20名は現場での申し出により配属が決定したかのように書いているが（『女兵』138頁）、謝冰瑩は今回の出征直前に河南での戦闘に救護隊として20名が選抜されており、この者たちが医務処に配属されたとする（『行軍日記』『中央副刊』62（1927年5月25日））。執筆時期からみて、後者のほうが信頼性が高い。
- 53) 医療衛生の授業に関しては、『女兵』では全く触れられていない。
- 54) 陳は卒業前後の自らの状況について言及しない。
- 55) 歴史に名を残すという意味でいうと、『中国歴代女名人辞典』に13名の女生隊隊員の伝が掲載されているのが参考になろう。
- 56) 『中央副刊』73、1927年6月6日。大脚とは纏足をしていないこと、髪がないとは断髪してい

- ることをいう。いずれも女性解放のシンボルであり、湖北省の婦女協会が積極的に推進していたが、地方にまではなかなか浸透しなかった。
- 57) 例えば、婦女協会の黄定慧は1990年代の回想のなかで、三八婦人節のパレードに参加した女生隊について「私たちは彼女たちをととても誇りに思いました。みなが彼女たちに拍手を送りました」と述べている（Wang, p. 300）。
- 58) その最も顕著な事例が農民協会と婦女協会の確執である。婦女協会の主な仕事の一つは不当な結婚を告発して離婚の手助けをすることであったが、これは革命の原動力である男性農民に動揺をきたすことになった。武漢政府は、こうした場合、最終的には農民協会の肩を持つことになった。
- 59) この点は共産党のジェンダー観にもあてはまるが、それは共産党のジェンダー観も五四時期のジェンダー観と無関係ではなかったからである。
- 60) 『蘭蘭回憶録』142-143頁。譚樂華もこのことを男女平等実現と結びつけて語っている（『女兵』103頁）。教官の鍾復光は当然W字に対する反感を述べていないが（『女兵』34頁）、学生であった呂儒貞や譚浩都も否定的な見方はしていない（呂儒貞、137頁；『女兵』161頁）。映画『大浪淘沙』では肯定的に描かれている。
- 61) 漢口『民国日報』1927年4月4日。黄定慧は反動派が三月八日の婦人節のパレードに若い娼婦を裸で飛び込ませたと証言する（Wang, pp. 300-301）。『史海鈎玄』37-39頁によれば、この日の首謀者は黄震竜で、婦女協会の活動から排除された金雅玉ら18名の妓女を唆して封建反対、革命支持を示させたという。
- 62) 鍾復光、5頁。「反動派」にとって娼婦と女兵は、女性性からの逸脱という点で共通していた。第二次世界大戦時のアメリカの女兵も様々な中傷にさらされ、味方の男性兵士から売春婦と呼ばれることもあった（『総力戦と女性兵士』101、107-108頁）。日本では海外で売春に従事していた女性、いわゆる「からゆきさん」のことを「娘子軍」と呼んでいた。
- 63) 天馬「従裸体運動想到的話」『申報』1933年7月20日、「婦女同志会反対免恥游行会」『申報』1927年4月24日。後者によれば、免恥裸体游行大会は「共産叛徒」らが女性の羞恥心を打破し、社会秩序を混乱させ、公妻を実行する契機とすべく企画したものであり、すでに加入者は千人あまりに上っていたという。
- 64) たとえば「婦人の裸行列」『大阪朝日新聞』1927年4月8日。
- 65) 婦女協会の主な仕事は離婚の調停と断髪の励行だったが、特に前者は「反動派」に限らず、農民協会の男性までもが反発し、国民政府は農民協会を優先する政策をとらざるを得なかった。婦女協会の女性への攻撃が際立つのは、女兵に比べて人数が多かったことと、非武装であったこと、外部世界との接触が多かったことが挙げられる。
- 66) 漢口『民国日報』1927年6月6日、9日、15日。乳房に対する執着は、女性性の否定としての象徴的意味を持つように思われる。ただ史料が限られているので、ここでは指摘のみに止める。
- 67) したがって、正規軍／非正規軍という指標は中国ではあまり有効とはいえない。佐々木のいう非正規軍には叛乱（革命）軍も民兵も含まれるのだろうか。

参考文献

〔单行本〕

- 『一個女兵的自伝』謝冰瑩，上海 良友圖書印刷公司，1936
- 『回憶惲代英』北京 人民出版社，1982
- 『各国女兵士の出現』尾瀬敬止，東京 亜細亜出版社，1938
- 『軍校』→『武漢中央軍事政治学校』
- 『康克清回憶錄』康克清，北京 解放軍出版社，1993
- 『黃埔軍校將帥錄』陳予欽，廣州 廣州出版社，1998
- 『黃埔軍校史料』廣東革命歷史博物館，廣州 廣東人民出版社，1982
- 『胡蘭畦回憶錄』胡蘭畦，成都 四川人民出版社，1985
- 『史海鈎玄』竟陵子，北京 昆侖出版社，1989
- 『謝冰瑩文集』（上，中，下冊），艾以・曹度編，安徽文芸出版社，1999
- 『女子從軍史』王子今，北京 軍事誼文出版社，1998
- 『女兵』→『大革命洪流中的女兵』
- 『女兵士の自伝』謝冰瑩，諸星あきこ訳，東京 青年書房，1939
- 『讓女人自己說話——親歷戰爭』李小江主編，生活・讀書・新知三聯書店，2003
- 『戰爭与女性』→『二十世紀中国女性史』
- 『総力戦と女性兵士』佐々木陽子，東京 青弓社，2001
- 『大革命洪流中的女兵』中華全国婦女聯合会・黃埔軍校同学会，北京 中国婦女出版社，1991
- 『中国女紅軍』劉青霞・湯洛・華杉，西安 陝西人民出版社，1996
- 『中国地方志民俗資料彙編』華東卷，北京 書目文獻出版社，1995
- 『中国婦女運動史——新民主主義時期』中華全国婦女聯合会，北京 春秋出版社，1989
- 『中国婦女運動歷史資料（1921-1927）』中華全国婦女聯合会婦女運動歷史研究室，北京 人民出版社，1986
- 『中国歷代女名人辞典』盧瑞蓮，長沙 湖南師範大学出版社，1995
- 『二十世紀中国女性史』北京 中央電視台製作，1999
- 『武漢中央軍事政治学校』張光宇，武漢 湖北人民出版社，1987
- 『武漢国民政府史』劉繼增・毛磊・袁繼成，武漢 湖北人民出版社，1986
- 『包惠僧回憶錄』包惠僧，北京 人民出版社，1983
- 『李宗仁回憶錄』李宗仁，南寧 廣西人民出版社，1980
- 『梁啓超年譜長編』丁文江・趙豐田，上海 上海人民出版社，1983
- Wang Zheng, *Women in the Chinese Enlightenment: Oral and Textual Histories*, Berkeley: University of California Press, 1999
- Xie Bingying, Lily Chia Brissman & Barry Brissman trans., *A Woman Soldier's Own Story: The Autobiography of Xie Bingying*, New York: Columbia University Press, 2001

〔論文〕

- 上野千鶴子「女性革命兵士という問題系」『現代思想』32-7，2004-6
- 上野千鶴子・李小江「国家の中から，国家を越えて」『現代思想』32-7，2004-6
- 許子威「從軍校學習到廣州暴動」『武漢文史資料』14，1983-4
- 胡毓秀「首批女兵話当年——憶武漢中央軍政学校女生隊」『紅旗飄飄』23，1981

近代中国における女性兵士の創出（高嶋）

胡蘭畦「一段難忘的曲折的女兵生活」『武漢文史資料』14, 1983-4

舒雲「叱咤風雲的黃埔女兵」『炎黃春秋』1995-7

鍾復光「黃埔軍校女生隊的一段回憶」『文史資料選輯』33 (133), 1999

陳德芸「趙一曼烈士在武漢」『武漢文史資料』14, 1983-4

陳力田「黃埔軍校的山西籍女學員——王亦俠」『山西老年』1996-9

符浩「在討伐夏斗寅，楊森叛亂的日子里」『武漢文史資料』15, 1984-1

符号〔符浩〕「回憶軍校女生隊十一位同學」『武漢文史資料』, 2004-6

劉光慧「小脚女兵千里隨軍記」『武漢文史資料』14, 1983-4

呂儒貞「軍校女性生活散記」『湖北文史資料』21, 1987-4

脱稿後、『軍事組織とジェンダー——自衛隊の女性たち』佐藤文香，東京 慶應義塾大学出版会，2004 が出版された。平等，差異，軍事という三つの軸をもとにした分析手法，防衛大学校での調査は非常に興味深かったが，本稿に取り入れることができなかった。機会を改めて考えてみたい。